
ぼくがぼくであるわけ

いおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくがぼくであるわけ

【Nコード】

N9519D

【作者名】

いおり

【あらすじ】

今の生活になんの不満もないけれど、なにか居心地の悪さを感じている高1の望。彼が出逢った不思議な少年？悠希。悠希には生まれる前の記憶があるというのだけれど。望と悠希の二人の視点から物語は進行していきます。悠樹のせつない恋の行方は？最初BＬっぽいけど違いますので、あしからず！？完結しました。

1・望　く日々（前書き）

最初の方はB.L.ぽいのですが違いますので。

望と悠希、二人の視点から物語が進行しますので、多少ダブル箇所がでてきます。

1・望　く日々

新月の夜、マンションの上空に一つの白い光の玉が出現し、ゆっくりと暗闇を旋回していた。

少し遅れて、二つ目の玉が天より舞い降りてきた。

よく晴れた朝だった。

こんな日は、高校へ行かず、いつもとは反対の電車に乗って、どこか遠くへ行きたいなあ、なんて思うことがある。

今日も、そんな気分だった。

でも、ぼくはそうしない。

たぶん、他の人たちもぼくと同じことを考えたとしても、そうはしないように。

いつものように満員電車がやって来た。

ぼくは他の人たちの流れに乗ってその中に吸い込まれて行く。

なんだかそれが、凄く当たり前のようでもあり、違うような気がする。

今の生活リズムの中にいることが、心地よいようでいながら異物が喉につかえているような違和感を覚える。

本当は、自分がここにいないべきではないような不思議な感覚にとらわれる。

まるで、家族が他人に思えて、自分も別人に感じる、そんな時がある。

ぼくがぼくではないような……。

「わりーい！ 今日の約束パスな」

放課後、帰り支度をしているぼくの肩を内海くんがたたいた。

「どうして？」

「俺、さあー、今日、彼女とデートの約束しちゃったんだ」

内海くんは少し照れて、頭をかいている。

「この映画、内海くんが行くつていうからチケット買ったんだよ」

そうだ、本当はこんな映画、ぼくは行きたくなかったのだ。

「これさ、お前にやるから彼女とでも行けよ」

「そんな人、ぼく、いないよ」

ぼくは今だかつて、彼女がいたこともないし、振られたことも無い。

別に、女嫌いで男好きなんていう人種でもない。

ただ、人を好きになれなかっただけで。

「だったら、いいチャンスじゃないか、このチケット餌に、誰かさ
そえよ。望^{のぞむ}が誘えば、その辺の女子なら誰でもついて来るつて。
おまえつて意外と女子に人気があるんだつてよ、母性本能くすぐ
るとかつて。なんなら俺が頼んでやろうか？」

「いいよ」

ぼくは内心穏やかではなかった。

男が母性本能をくすぐるってほめられても、ちつとも嬉しくはない。
男らしいとか、たくましいと言われるならいざ知らずだ。

「望と映画に行きたい女子いませんか！」

内海くんが手を高々と上げると、チケットをひらひらとさせて叫んだ。

「やめてよ！」

ぼくは慌ててチケットをもぎ取った。

「内海くんこそ、ぼくのをあげるから彼女と行ったら？」

「あややは、ラブストーリーがいいんだって。んじゃ、時間無いから、俺いくぜ」

「勝手に楽しんでおいでよ」

「この埋め合わせは、必ずするからな」

「期待しないで待ってるよ」

高一になってもぼくは、いまだに自分をぼくと呼び、友人たちはい

つの間にか俺と言っていた。

ぼくはいつまでもぼくであり、なぜか俺と呼ぶことに抵抗があった。

2・望　く俺という彼　1

学校の帰り道、高校の側の広い公園を、ぼくは歩いていた。

駅まで少し遠回りなこの道は、お花見の季節ならいざ知らず、普段、高校の下校時間に利用する人はまずいない。

ぼくはこの静けさが気にいつている。

桜の木の仄暗いトンネルを抜けると、ちょっとした広場があり、急に明るくなる。

なんだかその光のギャップが、まるで瞬間移動でもしたかのような錯覚を与える。

そんなところもいい。

新緑のアーチを抜けて目の前が一気にひらけた。

弱まり始めた光の中、バスケットボールを一人追っている中学生位の少年がいた。

キャップを深くかぶりカーキ色で7分丈のショートパンツに白いだぶだぶのパーカーを肘までまくっている。

砂埃を上げて走り回る彼の姿は、まるでボールと戯れているような軽やかな動きだった。

彼の背丈はぼくと同じ位、たぶん、一六〇センチ弱ってところかな。

ぼくに気付いた彼は側に来ると、上から下まで睨め回すようにぼくを見る。

彼の人を射るような目付きに、ぼくは一步下がった。

「可愛いじゃん」

拍子抜けした。

人を睨みつけておいて言うような言葉ではないし、まして男が男に言うセリフでもない。

「きみさあ、バスケ好き？」

彼はぼくを挑発するように、ドリブルを始めた。

普段だったら、こんな見知らぬ少年のことなど無視して通り過ぎるはずだった。

なのに、今日は違っていた。

なんだか頭と関係なく、身体がついていってしまった、まるで条件反射だ。

ぼくは、あまり運動神経がいいとは言えない。

でも、なぜか球技は好きだった。

ただ、うまいとはいえないけれど。

3・望　く俺という彼　2

ぼくには、彼の後を追うのが精一杯で、ボールを奪うことなどうてい出来なかった。

その間、何度となく彼は器用に同じ枝と枝の間にボールをくぐらせる。

彼の目には、ボールとバスケット代わりの枝しかはいてっていないようだった。

ぼくという存在が忘れ去られているように。

だが、しばらくすると彼は、ぼくのペースに合わせてくれるようになった。

彼の背中しか見ることの出来なかったぼくを、やっと、前へ回り込ませてくれた。

右、左、右

フェイント！

彼はぼくの攻撃を軽々とすり抜ける。

彼のボールが取れそうで取れない。

まるで彼の手とボールが強力なゴムでつながれているようだ。

いつしかぼくは、このゲームが楽しくなっていた。

なんだか懐かしい感覚だった。

ひよつとした弾みに、ぼくの足が彼の足を引っ掛けてしまった。

あっという間に、彼は地面に倒れた。

「ごめん」

謝りながら差し出したぼくの手につかまろうとして、彼は急に手を引っ込めた。

砂にまみれた手と体をはたきながら、彼は立ち上がった。

彼がパンツの裾を少したくし上げると、砂のついた右膝には血がにじんでいる。

ぼくは近くにある水飲み場へ彼を連れて行っった。

「ちょっとしみるかも」

ぼくは、彼のけがをした膝に水をかけるまえに声をかけた。

かがんでいたぼくは、彼を見上げた。

のぞきこんでいた彼の顔が、すぐ目の前にある。

まじかで見た彼の顔は、長いカールのかかったまつ毛に縁取られた二重。

しかも黒目がちの大きな眼をした女顔である。

ぼくなんかより、彼の方がよっぽど可愛い顔をしている。

きつと、彼もぼくと同じように幼少時代には女の子と間違えられていたに違いない。

ひょっとして、今かもしれない。

なんとなく親近感がわく。

まあ、ぼくはといえば、もう女の子に間違われることもなくなったが。

彼の膝に水をかけながら、ぼくは以前にもこんなことがあったような気がした。

「しみる？」

彼をもう一度、見上げながら聞いた。

「大丈夫」

言葉とは裏腹に眉根にしわをよせている彼が、なんだか微笑ましかつた。

彼は洗い終わった手足をハンカチで拭きながら、ぼそっとつぶやいた。

「ありがとう」

語尾は聞き取れないくらい小さかった。

傷口からは、まだ血がにじんでいる。

ぼくが鞆から絆創膏を取り出そうとすると、チケットが落ちた。

彼はそのチケットを拾い上げた。

「二枚？ この映画、確か今日までじゃん」

「一枚は友たちの分だったけど、もう要らなくなった」

彼の膝に絆創膏を貼ってあげた。

「彼女と行けば」

「そういう人いないよ!」

思わずぼくは声を荒げてしまった。

みんな同じだ、彼女、彼女って。

なんだかがっかりした。

彼だけは、そんな普通の人が言うようなきまり文句を口にしないと、勝手に思っていた。

「ふうん、じゃあさ、俺と行かない?」

こんな可愛い顔していて、彼も自分を俺って言うんだ。

なんとなく、顔と言葉のアンバランスさを感じた。

4・望　く映画館

彼に引きずられるように、ぼくは駅近くのシネコンへやって来た。

この一角はイタリアをイメージしたとかでちょっと異空間に迷い込んだかの錯覚を覚える。

それはともかく、だいたい、なぜ初めてあつた人とぼくは映画を観にこなくてはならないのだ。

そう思いながらも、なんだか彼には逆らえないものがある。

ぼくは押しに弱い。

これは生まれた時からかもしれない。

「映画にはやっぱりポップコーンだよね」

甘い香りのするキャラメルポップコーンを、彼は口一杯に頬張ると満足そうな顔をした。

まるで子供みたいだ。

ぼくはコーラを飲みながら、なんだか盗み見るように、彼のおいし

そつに食べる顔へ目をやった。

ポップコーンを三分の一ぐらい食べたところで、彼は急にぼくの前にポップコーンの入れ物を差し出した。

「ごめん、気付かなくて」

「ゴホッ、ゴホゴホ」

ぼくはまるで、いけないことをしているところを見とがめられたかのようにびっくりして、口に入っていたコーラの一部を気管に流し込んでしまった。

「大丈夫？」

「あつ、う、うん」

まだすりむいた様にひりひりする喉で答えた。

「欲しいならさ、手えだせよ。俺、気利かないからさあ」

彼はスクリーンを観たまま、ぶっきらぼうに言う。

「あつ、いや……」

ぼくが彼の方を時々見ていたのを、どうやらポップコーンが欲しいのと勘違いしたらしい。

そんなに、もの欲しそうな顔をしていたのだろうか？

物欲しそうな顔って……？

なんだかはずかしくなって、うつむいてしまった。

本編が始まって、隣の彼が気になってなかなか映画に集中できないでいた。

彼は何者なのだろう？

突然ぼくの目の前に現れ、何のためらいもなくぼくを自分のペースに引きずり込んでいる。

だがそのうち、その疑問も忘れて、ぼくは映画の世界にのめりこんでいった。

そして、主人公を助ける為に恋人が撃たれて死んでしまう場面で、ぼくは不覚にも目に一杯の涙をたたえてしまった。

でも、その涙は主人公に同情してのものでも恋人に対するものでもないような気がする。

なんていうのか。

まあ、どっちにしる内海くんと一緒になくてよかった。

涙しているところなど見られたら、また、彼にぼくをからかうネタを提供してしまっただろう。

いや、案外、内海くんのほうが先に泣き出していたかもしれない。

以外に彼は、ぼくより涙もろいほうだ。

内海くんは、そんなとき、必ず言う言葉がある。

『男は女より情が厚いのだ』と。

でも、ぼくは情が厚いか薄いかと涙の関係は無いと思うのだが。

涙を流さずとも悲しいときは悲しいし、空涙というものもある。

ふと、彼のことが気になって右側を見た。

あちらこちから響いてくる鼻をすする音とは反対に、彼はあくびをしていた。

映画が終わる頃には、彼は映画ではなく夢を見ているようだった。

5・望　くバーガーショップ

映画館を出ると、あたりはすっかり暗くなっていた。

「腹減った。ハンバーガーでも食べてかない？」

「ぼくは」

「気にすんなって、俺がおごるから」

「そうじゃなくって」

彼には人の事を考える心が欠如しているんじゃないかと思う。

「あつ、ここ、ここ。　この店よそのよりちょっと高いけど、おいしいんだよな」

「えっ、あつ、うん」

「なあ、チケットの御礼させてくれよ」

店内は若者たちで騒がしかった。

ぼくのような制服姿が多い。

あれだけのポップコーンの山を食べつくしていながら、まだおなか
がすいていたらしく彼はひと言もしゃべることなく食べている。

ロースカツバーガーとポテトフライにコーヒースエークを、彼はき
れいに食べつくした。

「ふうー。満足、満足」

無愛想な彼は、物を食べている時、一番幸せな顔をしているんじゃないかと思う。

「映画どうだった？」

以外に面白かった。

口にしようとしてやめた。

この映画のクライマックスに大あくびをしていた彼がどう思っているのかを気にして、気のない返事をした。

「まあまあかな」

「ふうん、じゃあさ、あの恋人みたいに、君は人の為に死ねる？」

ぼくは黙り込んでしまった。

「どう？」

「わからない。自分の命が惜しいとは思わないけれど、人を好きになつたことないし」

なぜこんなこと、あつたばかりの人と話しているのだろう。

「きみの……、自分の命、惜しくないの？」

彼ははずかすかとぼくの領域を侵してくる。

彼のまっすぐな視線を感じてうつむいてしまった。

こんな話題から早く離れたい。

「俺、死ねるよ」

「なぜ、そんなこと言えるの？」

きつぱりと言い切る彼に、腹が立ってきた。

「俺、そういう人いるから」

ドクンとぼくの心臓が波打った。

彼にはいるのか、そういう人。

でも

そんなの

口だけに決まってる。

偽善者！

「でも、残された方はどうなるんだろう」

ふと言葉がついて出た。

「うれしい？ 自分のために死んでくれてうれしいと思うっ。」

なにをしゃべっているのだろう、ぼくは。

意地が悪い。

自分でそう思いながらも、次々と言葉が出てくる。

「そんなの、死んだ人の自己満足だよ。死んだらそこで終わりだけど、残された方は、一生苦しんで生きていくんだよ。たとえば、死んだ相手を愛していなかったとしても」

何をぼくはむきになっているのだろう。

こんな初めて会ったばかりの少年の前で。

テーブルに両肘をつきその上に顎を乗せたまま、じっと彼はしゃべり続けるぼくを見詰めている。

なんだかその瞳にドキッとした。

「だよね」

彼はすくつと立ち上がるとぼくに背を向け、手を肩の辺りで左右に振ると去って行った。

残されたぼくは、しばらく呆然と、今まで彼が居た場所を眺めていた。

なんだったんだ、あいつ……

彼に会ってから、ぼくは不思議な夢を見るようになっていた。

それは、二つの光の玉がぼくの住むマンションに飛んでくるというものだった。

6・悠希　く女子校

「悠希ゆうき！　部活は？」

慌てている俺にナオが声をかける。

中学からの親友だ。

「ごめん、言い忘れてた。　今日はパス！　この間の検査結果聞きに、病院行かなきゃなんないから」

「それだけ元気なら、問題無いって」

「まあ、これも親孝行のうちってとこかな」

「悠希が、親孝行とはね」

「たまにはね。　じゃあ、バイイ！　あっ！　部長に言っというて」

鞆を持って、俺は教室を飛び出した。

「悠希さまあゝ、バスケは？」

体育館とは反対の方向へ歩き始めた俺に、廊下でたむろっていた女子たちがキヤーキヤーと騒ぐ。

「またね！」

俺がウインクを投げかけると、黄色い歓声はさらに大きくなった。これじゃ、まるでアイドルだね、俺は苦笑した。

まあ、この状況を幾分楽しんでもいるし、反面わずらわしいと思うこともある。

もともとこのお嬢様学校を選んだのは、俺の男っぽい性格を危ぶんだ両親だった。

中高一貫である女子校に入れば、少しは女らしくなるであろうというありがた〜い親心から、俺を無理やりここに閉じ込めたのである。

もし、この様子を見たら、自分たちの選択が誤っていたのではないかと大いに悩むに違いない。

だいたい女ばかりというのは、かえって恥じらいというものを無くすみたいだ。

暑い日にはスカートの裾をバタバタさせて涼んだり、大声で彼氏とあったことを話していたり、そばにいるこっちの方がなんだか恥ずかしい。

だが、まあ初めのうちは嫌々だった女子校生活だが、今では大好き

なバスケをやって、それなりに楽しんでいる。

高等部になって一年のうちからレギュラー入りを果たした俺は、時々一部の先輩から嫌がらせを受けることもあったが、大半の人は優しくしてくれるのでそれなりに居心地がよかった。

自慢じゃないが、成績も常にトップクラス。

いやー、青春を謳歌しちゃってるってわけだ。

だが、俺は、ここが本当の俺の居場所でないことを知っている。

俺には、生まれる前の記憶がある。

それは、俺の本当に入るべきだった身体に、どじなあいつが間違っ
て入ってしまったというもの。

だから俺は、仕方なくあいつが入るべきだった身体に入った。

ようするに、本当は俺が男で、あいつが女に生まれてくるはずだったのだ。

まあ、そんな話し、誰も信じちゃくれないけどね。

たぶん、あいつも信じちゃいない。

だから、そのことは転校して以来口にしたことはない。

それでもこれは紛れもない事実だ、変えようがない。

もしも、あいつが、あの時、間違えさえしなければって思わないこともない。

だからと言って、俺はあいつのことを恨んではない。

なぜなら生まれる前から、俺はあいつに好意を持っていた。

どうして、生まれる前からあいつが好きなのかわからない。

人はそれを“運命の人”と呼ぶのかもしれない。

でも、俺はそんなのどうでもいい。

ただ好き

ただ、あいつと一緒にいられるなら他のことはどうでもいい。

そして、いつまでも一緒にいられると思っていた。

だけど、それは、ほんの少しの間だけで、俺たちが小学校二年に、俺の家は引っ越してしまった。

それから一度だけ、一人であいつの家に行った事があった。

それから、あいつには会っていない。

小六の時、近くに越してきたのだから会いにいけないこともなかったのだが。

俺の本当の身体を持つ、
望。のぞむ

望は、今、どうしているのだろう。

今でも俺が会いに行った日のことをこだわっているのだろうか？

それとも、俺のことをすっかり忘れているのだろうか。

しばらく思い出す回数が減っていたあいつのことを、この頃頻繁に
思い出すようになった。

会ってみたいなあ。

7・悠希 くもどりたい

夕べ俺は眠ることが出来なかった。

医者に言われたことが頭の中をグルグル駆け巡って。

ただの筋肉痛だと思っていた膝の痛みが腫瘍のせいだったなんて。

骨肉腫。

詳しくは検査のための手術をしなけりゃ判んないって言われたけど。

大概は良性で化学療法や手術で治るって。

だけど

もし

バスケ

出来なくなったら？

もし

死

の？

白み始めた空を見上げながら、家を出た。

会いに行こう、俺の本当の身体に……。

俺の昔住んでいたマンションは、俺の利用する駅から三つ下った駅の近くにあった。

引っ越してから一度、行っただけだ。

だけど、たどり着ける自信はある。

ずっと戻りたいと願っていた場所なのだから。

いや、場所というより、戻りたい時間。

いつだって望に会いに行こうと思えば、会えたのかもしれない。
まして、4年前、駅みつつまで近づいたのだから。

俺達の心の距離は駅の数よりも遠くなっていたのかもしれない。

あの時以来

手入れの行き届いたマンションは、7年も経つというのにまったく変わっていない。

オートロックのドアを出て来た人と入れ違いに中へ入った。

オートロックの効果なんてこんなもんだ。

入ってすぐ目の前にエレベーターはある。

だが、俺はそれを利用せずに階段を使った。

バスケットで鍛えているはずの俺の心臓が、たった一階分登っただけで苦しい。

永遠に望の部屋にたどり着けないんじゃないかと思った。

四〇七号室、これが昔、俺の家だった。

へー、今は中田って人が住んでるんだ。

ピンポンを押して『俺、昔ここに住んでたんですよ！』
なんて言ってみたい。

その隣が望の家……。

急に不安がよぎった。

今もまだ望の家族が、ここにいるのだろうか？

今まで考えもしなかった、

望の家族が引越しているかもしれないなんて。

俺は、おそろおそろ目を向けた。

隣の角部屋

四〇八号室

……
弘前。ひろね

よかった！

「いってらっしゃいー！」

中から女性の明るい声がする。

中年の男性が出て来た。

望のお父さんだ。

慌てて帽子を深くかぶり階段を登りかけた俺に、おじさんが声をかけてくる。

「おはよう」

「おはようございます」

自然なおじさんの挨拶に俺は緊張気味に答えた。

階段を降りかけたおじさんは一度振り向いて俺を見た。

一瞬怪訝な表情を見せたがすぐに階段を降りて行った。

十年と言う歳月が、おじさんの髪をかなり白くしていた。

でも、老けたと言うよりも、渋さを増していい感じ。

さすが、俺の本当の親父になるはずだった人だ。

8・悠希く望

5階へあがる階段の途中に腰を下ろして、望が出て来るのを待った。

何度も何度も時計を見た。

ちつとも進まない時計の針に、壊れてしまったんじゃないかと時計に耳を当てた。

ものすごいスピードで波打つ俺の心臓の音にかき消されてしまうのではないかと思うほど、小さな音をゆっくりと刻んでいた。

膝の上に乗せた腕にはめられた時計に耳をつけたままそつと呼吸をする。

時を刻む音と俺の命を刻む音が次第に一つになっていく気がした。

なんとなく落ち着く。

あれからどれくらい経ったのだろう、408号室のドアが開くとグレーのブレザー姿の望が出て来た。

ここからでは、顔の確認は出来ない。

まあ、顔を見たところで、本人と確認できるかは問題だが、でも、望に間違いない。

小学校2年当時、望には兄弟がいなかった、もし、あの後できたとしても、まだ小学生かそれよりも小さいはずだ。

彼が望に間違いない。

すばやく望の後を追った。

ある家の前で望は立ち止まる。

この家の人と学校に行くのだろうか？ 相手は？ 女の子、それとも男？

どっちにしろ、すごく不安になる。

恋人がいるのだろうか？

今まで予想だにしなかったことが頭をよぎり、漬物石でも飲み込んだ気分になった。

「ゆづこちゃん」

俺のいる位置から、やっと聞こえるぐらいの声がする。

ゆづこちゃん？

あいつの言葉を反芻してみる。

お・ん・な

そのとき、息を切らして望の胸に飛び込んできたのは、ブルドックだった。

犬の勢いに倒れそうになりながらも、かろうじてバランスを保った望は、めちゃくちゃうれしそうな顔をしてその犬の頭や体中を撫で回した。

犬、好きなんだ。

そう言えば、子供の頃ふたりで子犬を拾ってきて怒られたことがあったっけ……変わってねえなあー。

ほっとした。

俺も犬になりたい！

でも、ブルドックは遠慮しときたい、どっちかっていったら、トイプードルやチワワのように女の子受けするやつがいい、うっ、俺って変態？

駅のホームで、望はぼーっと上を見上げている。

俺も望の眺めている景色が気になって、少し離れたホームの端で上を見上げた。

そこには、ホームの屋根と屋根の間越しに、電線で五線譜を引いたような細長い青空が広がっていた。鳩でもとまっていればそれはおたまじゃくし、完璧だね。

反対のホームに電車が入って来ると、望はその電車を見ていた。

あいつ、今の生活に満足してないのかな？　なんだか、そんな気がした。

そのとき、轟音を立てて望の前に電車が入ってきた。

急いで俺は、望の並んでいた列の後ろについた。

電車に乗り込むときは必死で忘れていたが、気付くと望は目の前にいる。

俺の心臓はまるでドリブルでも始めたように、暴れだした。

今日の前にいるのは、本来は俺の身体だったはずで……

なのに、なんで？　なんで、こんなに緊張するのだろう。

俺は大きく深呼吸をしまつてから、あわてて口を手で押えた。

やべー！　これじゃあ、いつも俺が迷惑をこうむっている変態おや

じと一緒じゃねえか。

電車が大きく揺れ、誰かが俺の足を踏んだ。

「いてっ」

小さな悲鳴が、俺の口から漏れるのと同時に、声がした。

「あつ、すみません」

身動きの取れない車内で耳に届いたその声は、望！？

かすかに向けられた横顔がそこにある。

「い、いえ」

俺は白いトレーナーを着て来たことを後悔していた。

尾行するには、ちーとばかりめだちすぎるんでねえの？

9・悠希　く公園で（前書き）

ここから、望　編と少しかぶるところが出てきます。

9・悠希　く公園で

朝からずっと、望が通う高校近くにある、この公園に俺はいた。

望が学校へ行くのを見届けてからずっと。

朝は心の準備も出来てなくて、声をかけられなかった。

望は、この公園を抜けて学校へ向かった。だから、ここで待つていれば、きっと、帰りにもここを通るはずだ。

そうは思ったものの、授業の終わる時間を過ぎても、生徒が誰一人として通らない。

あいつは来ないかもしれない。

そんな不安をかき消すように、誰かの忘れていったバスケットボールを追いかけていた。

木に向かってシュートしたボールを拾い上げたとき、俺はあいつを見つけた。

いざ、あいつを目の前にしたとき、なんて言っているのか分からなかった。

俺は何を言うために今まで待つていたというのだ？

今までは、あいつに会えたうれしさに舞い上がっていたが……

急に俺は自分に迫っている、死というものを改めて自覚した。

もし、望が生まれてくるとき、入る身体を間違えさえしなかったら、俺はこの若さで死の心配などしなくてもよかったのだ。

あいつが間違えさえしなければ、俺はちゃんと男として生まれ、そして、これからも生きていくことが出来たのだ。

俺の身体を返してくれ。

そんなこと、言えるはずがない。

そんなこと、言いにきたわけじゃない。

俺は望に近づいていった。

ただ、あいつの顔をもう少しよく見てみたくなって……。

これが俺の本当の身体。

これが俺の顔、目、鼻、口……

「可愛いじゃん」

あっ、俺、なに言ってるんだ？ 仮にも男に対して……。

「君さあ、バスケット好き？」

会いたかったはずなのに、何か言いたかったはずなのに、なんて言っていないのかわからない。

俺はその場を切り抜けるためにドリブルを始めた。

そのとき、あいつのことは何も考えていなかった。

ただボールだけを追いかけていた。

もし、望が俺を追いかけてきてくれなかったら？

そんなこと、そのときは考えていなかった。

幼い頃のように、望が俺の後ろをついてくる、ただ、そう思っていた。

いや、思っていたのではなく、感じていたのだ。

その通り望はついてきた。

少し経ったとき、俺の心に余裕が出来た。

望のことを考え、あいつのペースに合わせてあげることが出来た。

左、右、あいつは俺についてくる。

幼い頃のように、我武者羅に食いついてくる。

おもしれえー！

通学途中の腑抜けた望の顔が、嘘のように生き生きして見える。

こうでなきゃ。

なんで、もうじきこいつのために死ぬかも知れない俺が、こいつの心配をしなくちゃならないんだ？

「あっ！」

望が声を上げたときには、俺は地面に口づけをする寸前だった。

「ごめん」

また、あいつのせいだ、あいつのせいで転んでしまった。

倒れた俺に差し出された手をつかみかけて俺は慌てて引つ込めた。

照れくさかった。

幼い頃はいつもつながれていた手、それから八年という月日が過ぎ去った。

砂の付いた手と体をはたきながら、俺は立ち上がった。

パンツの裾を少し上げると、治りかけていたかさぶたが再び剥がれ落ちていた。

うーっ、またやつちまった。 あっ！

あいつは俺の肘をつかむと、水飲み場まで俺を引っばって行った。

「いいよ、自分でやる」

「だめだよ、ちゃんと洗わないとバイキンが入るよ、それに、ぼくのせいだし……」

そう言う望は俺のスニーカーと靴下を脱がせた。

『バイキンが入ったら、走れなくちゃうよ』

幼い頃のあいつは、俺がけがをするといつもそう言って俺の傷口に水をかけて洗ってくれた。

こうやってまた望に足の汚れを流してもらったら
病気も一緒に流れていくのだろうか……

蛇口に手をやりながら見上げる彼の顔が、のぞきこんでいた俺の前髪に触れるかと思うぐらいまじかに現れた。

慌てた俺は身体を起こしそうになりながら目線をそらすだけにとどめた。

あいつを感じていたくって……。

「ちよっとしみるかも」

望は視線を俺の膝に戻すと蛇口を開いた。

火照った足に、冷たい水が伝わってゆく。

細くて長いあいつの指が、優しく傷口に触れる。

傷の痛さとなんだかわからないもやもやが一緒になって、まるで塩をかけられたナメクジのように身体全体がキュッとちじんじまった感じ。

あいつの指が俺の膝から離れ、蛇口を閉めた。

それを名残惜しい思いで眺めながら、俺はポケットからハンカチを取り出すとそっと足を拭いた。

いつもだったら、傷口以外は無造作に拭いてしまふところなのだが、今日は違っていた。

望の触れた感触をかき消さないように。

望が鞆の中からなにやら取り出そうとしている。

たぶん、絆創膏だろう。

昔、望はいつも絆創膏を持っていた。

おとなしかったあいつは、けがなんかないのにいつも持っている。
不思議に思って、一度、聞いたことがあった。

『望はけがなんかないのに、何でいつも絆創膏持ってるの?』

『悠希ちゃんのためだよ』

その日以来、俺は母さんがポケットにいつも入れておいてくれる絆創膏を隠れて捨てていた。

そんなことをふと思い出していると、望の鞆からひらひらと何かが

落ちた。

拾ってみると、それは、俺の見たかったSF映画のチケットだった。

「二枚？ この映画、確か今日までじゃん」

「一枚は友たちの分だったけど、もう要らなくなった」

俺の膝に絆創膏を貼りながらあいつは答えた。

「彼女と行けば」

心とは裏腹な言葉。

ぶっきらばうにこぼれる。

もう高校生だ、彼女ぐらいいたっておかしくない。

まして、この身体の本当なら持ち主である俺が言つのもなんか変だが、なかなかの男前である。

「そついう人いないよ!」

ふくれつつらで、あいつが答える。

「ふん、じゃあさ、俺と行かない?」

よく言った!

俺
！

10・悠希　く映画館

嫌がる望を無理やり映画館へ連れて来た。

辺りにはキャラメルポップコーンのなんとも言えず甘い良い香りがある。

ポップコーンはしょっぱい物だと思っていたから、初めて友たちに勧められいやいや口にしたときはえらい衝撃を受けた。

こんなもありって。

それからは、必ず映画館で食べるのが楽しみになった。

だからもちろん今日も映画館に着くなり、ポップコーンを買った。

客席に着くと、俺はポップコーンを頬張った。

ポップコーンを途中まで食べたところで、ちらちらとこっちを見る望の視線に気付いた。

いくら要らないって言っても、人が食べているのを観ていたら欲しくなるよね。

「ごめん、気付かなくて」

朝家をでるときは、望とあんな風にデートみたいなことが出来ると

は思ってもいなかった。

それがうれしくってめっちゃ舞い上がっている自分と、それどころじゃないって凄く冷めてる自分がいる。

でも、やっぱり、俺、望が好きだ。

ひさびさに望に会ってますますそれを確信した。

理由なんてわからなくなっただっていい、ただあいつが好き。

だから、望の代わりに死んだってかまわないって本当に思っているのに、それなのにめっちゃくちや生に執着している自分がいる。

好きなバスケがしたいから？

おいしいものをもっと食べたいから？

やり残した事があるから？

やり残したもへったくれもねえ、まだ人生始まったばかりじゃないか。

望のそばにいたい

ただそれだけ

自分の命が惜しくないって
なんで、望はそんなこと言っただろう

そんなあいつのせいで俺は死ぬ

あいつは

人のために死ぬなんて自己満足だっ

たとえ、愛していなくっても……

か、なんかそれって俺に突きつけられたみたいでけっこうこたえた。

俺はわかっている、子供の頃、望は俺に優しくかった。

でも、それは誰に対しても優しいのであって、俺に対する愛情でも
なんでもないことを。

11・悠希　くバスケット部

「ざーけんじゃねえよ！　そっちの方からぶつかって来たんじゃねえか！」

二年の先輩に向かって俺は叫んだ。

「あんたがぼさつとしてるからよ。　だいたい生意気なのよ、一年のくせして」

ただ今バスケット部の練習試合の真っ最中、コートのだ真ん中である。

部長に可愛がられている俺が気に入らないのか、部長がいないところでは嫌がらせがひどくなる。

部長が、普通の人だったら、あんまり問題なかったんだろうけど……

部長、朝霧涼華は、聖華女子のスーパーアイドルなのだ。
あさぎりりょうか　せいかに

彼女に憧れて入った部員は数知れず。

よって、俺をうとましく思う奴もいるってわけ。

まあ、ごく一部の人だけなのだが。

いつもならこの位の嫌がらせ、受け流していたところだ。

だが、この時、俺は虫の居所が悪かった。

昨日、望とデート？　をして楽しんだ分、その反動が彼と別れてから起こった。

もう、バスケが出来なくなるかもしれない、そんな苛立ちがあった。

望のためなら死んだってかまわない、その気持ちに嘘はない。

だけど俺、そんなに出来た人間じゃない。

「そっちが先輩だから我慢してやってたのに、反則ばかりしやがって。審判も審判だぜ、これじゃ試合になんねえよ！」

「何も我慢してくれなくてもいいわよ、嫌ならやめなさいよ！　なんならバスケ部もやめれば」

「ああ、やめたやめた、こんな部辞めてやる！」

こんなに明るいうちに学校を出るのは久しぶりだった。

まだ日の沈みきらないなか、マンションに灯る明かりを眺めていた。

溜息をつく

さっきから何度目だろう

らしくねえ

「悠希」

「はい！」

名前を呼ばれて反射的に返事をしてしまった。

「なに溜息ついているの、こんなところで」

声をかけてきた髪の毛の長いスレンダーな女性は、自転車から降りた。

「あつ、朝霧先輩」

学校での髪を後ろに束ねている姿に見慣れていたので、一瞬誰かと戸惑った。

「悠希の家ってこつちじゃないでしょ。そっか、私に会いに来たの」

「えっ、まあ」

「悠希が私に会いに来るわけないでしょ。住所も知らないくせに」

「すみません」

切れ長の眼を細めて微笑む。

「聞いたわよ、安田さんたちとやっちゃったんだって」

頭一つ分ぐらい俺より背の高い先輩は、身体をかがめて顔を覗き込む。

「そうなんですけど」

「で、やめる気はないんでしょ、バスケット」

すぐに返事が出来なかった。

「家すぐそこなんだけど来る？ それとも、ここでそうやって彼氏でも待つてるの？」

「えっ、いや、つい懐かしくって。昔すんでたもんだから」

「ここにいたんだ。奇遇ね、こんな近くに住んでたなんて。もしかしたらどこかで会っていたかもね」

唇の端が少し上がる。

「会っていたら先輩みたいなきれいな人覚えていますよ、俺」

「へー、悠希がお世辞言つの」

「お世辞じゃないです」

「ありがたく受け取っておきます」

「ホントですから」

「ありがとう」

「いえ……」

「で、初恋の人でも住んでいるのかな、ここに」

頷いてから、慌てて否定した。

「いえ、そんなんじゃないです」

「あんな顔してる悠希、初めてだったから、よっぽど辛い恋の思い出でもあるのかな？」

「やだな先輩、俺だっていつもへらへらしてるわけじゃないっすよ」

「わかってるわよ、悠希はみんなが思っているほど軽くないって。だから、心配なんじゃない」

「朝霧先輩に心配されるなんて光荣だな」

「なに言ってるの。可愛い後輩たちのことはいつだって気にかけているんですよ、先輩は。じゃ、あんまり遅くならないうちに帰

りなさいよ
「

「もう帰ります」

「明日待ってるから」

「それは……」

先輩は俺の返事を聞かないうちに、長い足で軽々と自転車をまたぐと走り出していった。

すらりと伸びた手足で少し前かがみになってこぐ姿は、さまになる。

まるで自転車が、別の乗り物になってしまったようにかっこいい。

12・望 2 〱ラブレター 1

バスケット好きの少年に出会って、十日程経った朝だった。

あれから随分経ったような、すべて夢だったような、不思議な感じだ。

あの日も今日みたいによく晴れていた。

いつものように、反対側の電車に乗る勇気もなく、人の波に乗っていつもの満員電車に乗ろうとしていた。

「あゝ」

一瞬、あの時の少年かとドキツとした。

まっすぐ伸びた艶やかな長い黒髪は明らかに彼とは違う少女のものだった。

隣のクラスのアイドル的な存在の少女だ。

ぼくらのクラスでも時々話題にのぼる。

たしか……

ぼくの前に桜の押し花がついた封筒が差し出された。

反射的にぼくはそれを受け取った。

さくら

「あっそうだ、桜木亜紀！」

へんな名前だっと思ってたんだ、春と秋が一遍に来たみたいで。

ぼくが手紙から視線を上げると、そこにはほのかに甘い香りが漂っているだけだった。

次の瞬間、いきなりぼくは肘をつかまれ人の波から引っ張り出された。

そしてそのまま、反対の電車に引きずり込まれそうになった。

ドアは無常にもぼくをはさんだが、ゆっくりと開くとぼくを飲み込んで再び閉じた。

車内アナウンスが流れる。

「無理なご乗車はおやめください」

ぼくは辺りの冷たい視線に小さくなりながら、顔のほてって行くのを感じていた。

しばらくして我に帰り、自分を引っぱってきた人の顔を見た。

あの日の白いトレーナーの少年だ。

「座ろう」

ぼくの通う高校とは反対方向に進む電車の中はすいていた。

「あっ！」

思わず大声を上げてしまい、今度は耳まで熱くなった。

ぼくは初めて気付いた、彼が女の子であったことに。

今時、誰もが制服のスカート丈をとて短くしているなか、膝の辺りまであるスカートをはいた彼、いや、彼女が目の前にいる。

「きゃっ、どこみてるのよーん」

ぼくの目線がスカートにあることに気付くと、わざとらしく彼、いや、彼女がスカートの裾を鞆で隠した。

彼女は兎がぴよんとはねるように座席に座り、隣の席を手で叩いてぼくにも座るよう促した。

隣にぼくが座ると彼女はぼくの耳に囁いた。

「男だと思ってたんだろ」

すぐさまうなずいてから後悔した。

普通、こういう時は否定すべきではなかったのだろうか？

今、目の前にいるこの人は、紛れもなく女に見える。

でも、始めて会った時は男だと疑わなかった。

まあ、見た目は女と言った方が自然なんだけど……

だけどそれは、容姿というより雰囲気だった。

「正直だね。でも、気にしないでいいよ。俺、全然気にしてないから」

少しは気にした方がいいんじゃないの……口まで出掛かった言葉を飲み込んだ。

もったいないな、女の子としてかなり可愛い部類に入るのに……

「俺、本当は男だし」

「……？」

「きみは考えたことない、女だったら良かったのにとかさ」

「ぼくは男だ」

大声を出しそうになったが、抑えた。

小さいころにはよく女の子に間違われ、女の子だったら良かったのにと言われ続けた身としては、こういった会話には過剰に反応してしまう。

「きみは本当にきみなの？」

「ぼくは……」

言いかけて言葉に詰まる。

なんて言っているのか分からない。

本当に、ぼくはぼくなのだろうか？

いつもの疑問が心をかすめた。

今の生活になんの不自由も不満もない。

なのに、なぜか分からない居心地の悪さ。

13・望 2 ヲラブレター 2

「ラブレターでしょ、これ。可愛い子だったね。それに、望好きでしょ、髪が長い」

ぼくから奪った封筒をぼくの目の前でちらつかせた。

「開けちゃおうかな？」

「勝手にすれば」

彼女は少し怒った顔でぼくを見る。

「ほんとに？」

「だったら、返してよ」

「返して欲しいの」

「別に、いらないよ、そんなの」

彼女はじつとぼくを見詰めている。

なんだか彼女といると調子が狂う。

「それって、失礼なんじゃないの、彼女に対して」

「きみが取ったんでしょ、読みたいなら読めばいい。ぼくはどっちでもいい」

「望は人を好きになったことないから、そんな冷たいことと言えるんだ。」

え？ 彼女はぼくの名前を呼んだ。

まだ名乗ってもいないのに。

「淋しいね。 それって、生きてる楽しみひとつ減らしてるよね」

彼女は手紙をぼくに差し出し、ぼくはそれを受け取る。

ぼくは、ただ生きている。

いつも、何か不安定な、とりとめのない焦燥の中で、ぼくは自分の生きている意味をつかめずにいる。

「ねえ、きみはなんのために生きているの？」

なぜだか彼女に尋ねてしまった。

「好きなことをやるため」

「好きなことって？」

「バスケやって、うまいもん食べて、寝ることかな」

「そんなこと？」

「うん、そんなこと」

彼女はぼくの悩みの答えをいとも簡単に言っただけ。

しかも、そんなこととあっさりとしている。

「一番大切なのは、好きな人がいるから。でもさ、俺の片思いだけだ」

ぼくを見据えてる。

どうして彼女は恥ずかしげもなく好きな人の事が言えるのだろう。

「あつ、おまえ、今、どうせふられたんだろうって思っただろう」

「そ、そんなこと思っていないよ。今言われるまでは」

「ひでえーな」

彼女の軽い肘鉄が飛んでくる。

「冗談、冗談」

「でも、はつきりふられた方がましかな」

「生殺し状態」

「だね」

「かわいそう」

「ほんとにそう思っっ？」

「うん」

「じゃあさ、今度、デートしてよ」

「……」

「そんな困った顔すんなよ、ジョークだからさ」

「誰でもいいの？」

「そんなことないよ」

「でも……」

「きみだから」

「ぼく？」

「そう」

「あっ、学校」

急に学校を思い出して立ち上がった。

でも、彼女にブレザーの裾を引っ張られ、そのまますぐにイスに逆戻りした。

「海、見に行こう、海。好きな作家が住んでる所があるんだ、このずっと先の駅に」

「家、わかるの？」

「知らない」

彼女の答えは簡単だ。

「それじゃあ」

「知らなくたっていいじゃん。なんかさ、この海があの小説の舞台かな、とか考えたら、小説ん中飛び込んだじゃったみたいで楽しくねえ？」

生き生きと話す彼女が、うらやまし。

「一人で行ったら、ぼくを巻き込む理由ないでしょ」

「物事すべて理由が必要なわけ？ まあ、そういうタイプだね」

ぼくは何故か不愉快になった。

まだ二回しか会っていない彼女に、ぼくの何が分かるというのだ。

次の駅で降りて反対の電車に乗れば、今日も今まで通り普通の生活に戻ることができる。

ただそうするだけのことなのだ。

そう、ただそうすれば元通りになる。

元通り……。

ぼくは電車を降りなかった。

それにしても、だいたい彼女は、なぜぼくの前に現れたのか？

彼女は、今までぼくがやりたくても出来なかったことを、難なくやり遂げてしまう。

彼女といれば本当の自分に会えるような気がした。

本当の自分て……？

14・望 2 ーラブレター 3

ベルが鳴って電車のドアが閉まろうとしていた。

彼女はぼくの手を引いて突然ホームへ飛び降りた。

彼女の行動はいつもジェットコースターのように、目まぐるしく変わる。

ぼくはジェットコースターの縁に捕まって、振り回されているだけのようだった。

それは、昔にもあったような、懐かしい感覚だった。

そういえばぼくは、子供の頃から自分から行動を起すと言うより他の人に巻き込まれるタイプだった気がする。

「じゃあね。ここからだったらまだ学校間に合うだろう」

彼女が側にあつた階段を駆け上がる。

「まって！」

思わず声をかけた。

このまま分かれたら二度と彼女に会えない気がして。

彼女は、突然現れて唐突に姿を消す。

名前も知らなければ、ぼくからは連絡の取りようさえもない。

「明日明後日と家の近所の神社がお祭りなんだ。一緒に行かない？」

言ってしまったから、彼女と同じ制服の女子高生たちが辺りにいることに気付いて急に恥ずかしくなった。

ここは彼女の学校の乗り換え駅だった。

彼女は踊り場から振り向きざまに声を上げた。

「日枝神社！」
ひえい

「知ってるの？」

「明日のお祭りと言ったらそこだろ。俺、前近くに住んだ」

そうなんだ。

ぼくは声にしなかった。

恥ずかしかったから。

「なあ、これって、デートの誘い？」

「えっ、あっ……違うけど」

口ごもった言葉が、彼女のところまで届いたかはわからない。

「じゃあ、俺のしょうしんデートってことで」

シヨウシン？ 昇進、焦心……ああ、傷心。

「明日の土曜日、鳥居の前に四時。キャンセルはきかないよ」

ぼくは、走り去って行く彼女を見送った。

あつ、ひよつとしてぼくは、彼女をデートに誘ってしまったというわけだろうか？

でも、ぼくは、そんなつもりは毛頭なかった。

ただ、このままあえなくなるのも淋しい気がただけで……

その時、ぼくは手の中に残っている封筒の感触を思い出した。

甘い香りのするかわいらしい封筒を見つめながら思った。

ラブレターをもらった同じ日に、別の人をデートに誘うなんて、なんてぼくは不謹慎なやつなんだろう。

15・望 2 ヲラブレター 4

朝からなんとなくクラスメートのよそよそしい雰囲気を感じてはいた。

始めのうちはごく一部のひそひそ話を見かける程度で、それがぼくに向けられているものとは思ってもみなかった。

放課後まじかになると、ぼくのことを噂していると感じるようになった。

「よう、聞いたぜ、望！」

隣のクラスの男子と前のドア付近で話をしていた内海くんが、ぼくの所へやってきた。

「なにを？」

「すつげーな、望。 恋人いない暦十六年から、いきなりあんなかわいこちゃんゲットか」

「えっ？」

「俺もさあ、適当なところで妥協するべきじゃなかったな」

「なに言ってるんだよ、内海くんには可愛い彼女いるじゃない」

「それがさあ、ここんところうまくいつてなくってさ、って、俺の話してるばあいじゃないつうの。で、どうなんだよ」

「あ、彼女は、ただの知り合いで……」

「聞いてないぞ、そんな話」

「別に話すようなものでもないし」

「親友の俺にぐらい話したっていいだろ、そんなおいしい……いや、大切な話」

「そうかなあ」

「そうだよ、俺にだってチャンスがあつたかもしれないし」

「なんの？」

「そりゃー、なんだなあ、お友達になる、だよ」

「彼女はやめておいた方がいいよ。　口は悪いし、乱暴だし、それに女っぽいとこ全然ないし」

ぼくは、彼女の悪いところばかりを並び立てた。

でも、悪口を言ってしまった罪の意識から、申し訳程度の褒め言葉を蚊の鳴くような声で付け足した。

「まあ、顔は、かわいいけど」

「亜紀ちゃんて、そんな娘には全然見えないけどなあ」

「あき……あつ！ 忘れてた」

「なんだよ、誰の話してたんだよ。他にも女いるのか？ 絶対許さねえ、こいつ！」

内海くんの怒りをよそにぼくは、制服のポケットから少し皺の付いた封筒を取り出した。

「へー、これが」

内海くんは、ぼくの手から封筒を奪い取った。

「うーん、いい香りだ。なんだ、まだ開けてないのか？ 俺が開けちゃうぞ」

「どうぞ」

女の子からの手紙、そんなものはぼくにとってどうでもいいことだった。

と言うより、逆に気持ちいいものではなかった。

なんだか、ぼくの知らないところで勝手に自分のことを考えている人がいると思うと薄気味悪い。

「本当にいいのか？」

内海くんの拍子抜けした声がする。

「手紙なんてどれもいっしょでしょ」

「ラブレターだぞ！ ラブレター！ 恋文！」

「どれもこれも集約すれば、好きです、付き合ってください、この二つ」

「そんなこと言って望、ラブレターもらったことあるのか？」

「ぼくはうなづいた。」

「まあ、一通だよな」

「もう少しかな」

「三通ぐらい……」

内海くんは指を五本、六本と増やしていく。

「……えー！ なんだよそれ！ いつの間にそんなにもらってんだよ。 なんだか無性に腹たってきた」

内海くんは封を切り、中に入っていた便箋を取り出そうとしている。

『失礼なんじゃないの』

突然、彼女の言葉が思い出された。

「返してよ！」

取り戻そうとしたぼくの手は虚空をつかんだ。

「ふ〜ん、これが、今話題の恋文ねえ」

見慣れない男子が、ぼくのつかむはずだった手紙を持っている。

「だ、誰だ、おまえ？」

内海くんが大柄な見慣れぬ男子を見上げながらたじろいでいる。

「望の幼なじみ」

疑わしげにぼくを見る内海くんに、ぼくは首を左右に激しく振った。

「どいつもこいつも、どうしてこんな優男がいいんだろうね」

「ぼくはわからないでもないけど」

体格のいい男子の後ろから長身で細身の眼鏡をかけた男子が現れた。

「副会長！」

内海くんとぼくは一斉に声を上げる。

「光栄ですね、時の人に覚えていてもらえるなんて」

どう考えたって、ぼくより新堂先輩の方が有名人だ。

なんてったって会長よりも知名度が高い副会長。

成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗。

眼鏡は伊達でヨン様のように美しすぎる顔を隠すためという噂もある。

「岩城が、弘前望^{ひろさかのみつむ}という名前に聞き覚えがあるっていつから、ついできました」

岩城？ どこかで聞いたような……

ベース型の顔に太い眉毛。

どこか人を威圧する態度と身体。

「悠希^{はとこ}の再従兄妹だ」

ゆうき？ ゆ・う・き……

ゆうきちゃん？

そうだ、小学二年まで隣の部屋に住んでいた男の……いや女の子。

そういえば彼は、たしか、悠希ちゃんの家によく遊びに来ていた。

あーっ！

「まりちゃん！」

「その名で呼ぶな！」

ぼくが女の子と間違えられていたのが嫌なように、彼も外見には似つかわしくないこの名前にコンプレックスを持っていた。

と言っても、本当は『まり』ではなく『真理』と書いて『しんり』と読む。

「へー、まりちゃんねえ」

副会長が茶化す。

「悠希が勝手に呼んでいただけだ」

「初恋の人にはそう呼ばせていたんだ」

「うるさい！」

「彼女、こっちへ…」

「あっ！」

副会長の言葉を遮ってぼくは声をあげてしまった。

「会ったのか！」

まりちゃんが声を荒げる。

「たぶん」

ぼくは、弱々しく答えた。

ぼくと同じ日に同じ病院で生まれた、オテンバでガキ大将のような女の子。

反対にぼくはいつも悠希ちゃんの後ろに隠れているようなおとなしい子供だった。

だから大人達には、男と女反対に生まれてくればよかったのにねと言われた。

そうだ、あのジェットコースター娘は悠希ちゃんに雰囲気がつくりで、顔も面影がある。

なぜ今まで気付かなかったのだろう。

「たぶん？」

「彼女、名乗らなかったから今まで気付かなかったけれど、たぶん、彼女が悠希ちゃんだと思う」

「なに話したんだ！」

岩城さんがぼくの胸倉をつかみかかった。

「べつに」

彼女とまた会う約束をしたなんて言ったら、彼はぼくを殺しかねないほどの殺気を放っている。

「べつにつて」

岩城さんが唸る。

「今朝まで彼女のことを男だと思っていたくらいだから……」

「プツ、やっぱり悠希ちゃんて、男の子みたいな娘なんだ。　　ます
ます会ってみたいね」

「新堂にだけは会わせねえ」

「でもまあ、岩城が心配するようなことは二人の間には無かったよ
うでよかったじゃないか」

副会長の言葉にあまり納得した様子ではなかったが、まりちゃんは
教室を出て行った。

「あのさあ、本当の本当にラブレターそんなに沢山もらったことあ
るのか？」

内海くんは聞き取るのがやっと出来る位の声をかけてきた。

「まあ、バレンタインのチョコと一緒にとか……内海くんはないの
？」

「そんなこと、俺に訊くなよ」

「でも、みんなもらっているのが当たりまえかと思っていたから」

ぼくのおなかに内海くんの軽いパンチが入った。

16・悠希 2 浴衣

「母さん！ 浴衣！」
ゆかた

玄関を開けてくれた母さんの顔を見るなり叫んだ。

「何よ、帰ってくるなり」

「去年、花火大会につて、買ってくれたやつあるよね」

「こんなの着ないつて、袖も通してくれなかったじゃない」

「明日、着るから出してよ」

「仮装大会でもやるの？」

「ひでえなあ、お祭りだよ、お祭り」

「お祭りには少し早いでしょ」

「日枝神社ひえいのだよ」

「日枝神社つて……ああ、昔住んでいたところの？」

「そう」

「そう言えば今頃だったわねえ。でも、どうしてまた？」

「望と約束したんだ」

「のぞむって……」

「弘前望」
ひろのぞみ

「あの望ちゃん？」

「そうだよ」

「あの頃はとっても可愛かったから、今はさぞやかっこよくなっているんでしょうね。会いたいわねえ……でも、なぜ望ちゃんと？」

「ばったり会ってさ、今度、お祭りだからいっしょに行こうって」

「えっ、望ちゃんが誘ったの？ あ、おとなしい望ちゃんが、変われば変わるものね。変わらないのは悠希だけじゃないの」

「あいつも変わってねえよ」

「そう？ だって、悠希をデートに誘ったんでしょ」

「デートってわけじゃないし」

「なんだ、デートじゃないの。 あっ、悠希が誘ったのね」

「ちっ、違うよ」

「はいはい、そういうことにおきます」

「ほんとうだよ、望の方が言い出したんだから」

母さんに浴衣の着付けを教わる代わりに、夕食の後片付けを手伝わされた。

部活や勉強にかこつけて、今まで母さんの手伝いをしたことがなかった。

食器を洗っている俺の隣で鼻歌なじりに片付けをしている母さんの顔が、うれしそうに見えた。

母さん、毎日こんなこと一人でしてたんだ。

「ありがとう」

不意に言葉がついて出た。

「えっ？」

「いつもありがとう、って言ったの」

照れくささの為に洗物から目をはなさなかった。

「どういたしまして」

自然に聞こえる母さんの言葉。

皿が母さんの手の中で、かすかな音をたてた。

食事の片づけが終わり、母さんから着付けを教わる番になった。

いざ浴衣を着る段になって、やっぱり気恥ずかしさにしり込みした。

えい！ 武士に二言は無い、俺は男だ！

しっかりと折り目の付いた浴衣に袖を通す。

難しそうに思えた帯も結んでみると、意外に簡単だ。

「昔の人は着物の下に下着を付けなかったのよ」

「パンツはかねえの？ ありえねえ！」

「だから着物の裾がはだけないように内股でおしとやかに歩くんですって。 悠希もやってみたら、少しは女らしくなるかもよ」

「ぐえ、遠慮」

「悠希に女らしさなんて求めないから安心して。 悠希は悠希でいいの」

父さんが女らしくしろと怒る時、「悠希は悠希」母さんはいつもそう言ってくれる。

望が悠希として生まれていたなら、きっと、父さんの望むような可愛い女の子になっていたのだろう。

望と会わなくなってから、俺は制服以外女の子らしいものを身につけなくなった。

望を

この身体が女である事を忘れる為に……

だから浴衣なんて、小学校二年の時、望と初めて二人きりで行ったお祭り以来だ。

「似合う・か・なあ？」

「いいじゃない」

黒地に花柄の昔からありそうな浴衣だった。

可愛い系のこの顔には、奇抜な柄や粹な柄は似合いそうもない。

「本当は、ピンクの可愛いのがあったのよ。わたしはそっちの方がよかったけれど、それだと悠希が絶対着てくれないと思って」

確かに母さんの選択は、間違っていない。

ピンクも似合うとは思うが、俺には着られない。

自分が男だという自覚がある俺には、この無難な浴衣が精一杯だ。

浴衣姿の俺は、洗面台の鏡の前に立った。

眼を閉じたまま。

瞼を開けるのが怖い。

普段、俺はあまり鏡を見ない。

鏡の前で髪をとかしても、それは、髪型を整えるためだけであって顔までは見ていない。

無意識のうちに鏡を避けていたのは、望を忘れようとしていたのかもしれない。

どんどん美しくなっていく姿に、虚しくなってくるからだ。

鏡の前で眼を開けた俺は、一瞬で鏡に映った姿に心を奪われた。

可愛い。

身体を反転させたと、いままで止まっていた息を思い出したように吸い込んだ。

鏡に映った自分の姿に見とれているようじゃ、まるで鏡に求愛する小鳥のようだ。

鏡の前の自分にどんなに恋焦がれてもどうしようもない。

これは俺、望だけ俺だ。

生まれてくる前、俺はなぜすぐに本来入るべき自分の身体の中に入らなかったのかと無性に腹が立つ。

そうしていれば、こんなややこしいことにはならなかった。

だけど、この身体もこれからどうなるのかからない。

もし、死ぬようなことがあったとしても、俺は望の代わりに死ねて本望だ。

そうだ、その為に入れ換わったのかもしれない。

えっ？

「悠希ちゃんが、浴衣を着てくれるなんて……」

いつの間にか母さんがドアの影から覗きながら、涙を拭うのが目に入った。

なんか、俺もジーンときた。

病名が告げられた後、俺の前では病気の事を口にはしないけど、心配なのだ。

これから検査のための手術も控えている。

「やっぱり、悠希には望ちゃんが、一番なのかしらねえ」

「なんだよ、それ」

「引越すまでいつも言っていたでしょ、望ちゃんをお嫁さんにするって。いくらみんなが、悠希ちゃんがお嫁さんになるんでしょって言っても頑^{がん}として聞かなくって」

「それは……」

「私もその方があっていと思うわ。悠希が良いお嫁さんになれるとも思わないし」

「なんだよそれ」

「それにしても、望ちゃんの威力は凄いわね。悠希に、あれほど嫌がっていた浴衣を着せてしまうのだから。そう言えば、前にもそんなことがあったわね」

幼い頃、母さんが買ってくれたピンクの浴衣を着るのがいやで、駄々をこねた。

『悠希ちゃんに似合うと思うよ、ぼくが着たいぐらいだよ』

そう望に言われ、俺はピンクの浴衣に袖を通したのだった。

それが、初めて二人きりでお祭りに行った日。

そして、分かれの日になった。

17・望 3 〰 祭り 1

祭りの日、神社近くの道は、車両通行止めになる。

四時ともなると左右に立ち並ぶ屋台目当ての人たちで賑わい始める。これから人出はどんどん増えてくるはずだ。

すれ違う人の中には、知った顔もちらほら混ざっている。

彼女を連れた中学時代の同級生は、目をあわせた途端照れくさそうに会釈をしながら去っていった。

なぜお祭りに彼女を誘ってしまったのか、今更ながら後悔した。

境内入り口には、人待ち顔の人々があたりを気にしてる。

彼女は既に来ていた。

マイペースな彼女は、子供の頃時間にルーズだった。

「今日は早いんだ」

「デートに遅れちゃまずいっしょ……なに笑ってんだよ!」

浴衣姿の悠希ちゃんは、男の子と間違えたときとは別人のようだった。

「なんでも、クッククツ……」

「俺だって、こんな格好恥ずかしいんだから」

「に、似合っているよ、プツ」

「笑いながら言われたって説得力ゼロだ!」

色白の頬をほんのりピンクに染めて睨みつける。

「悠希ちゃんが、昔、浴衣で木登りをして袖を破いちゃったことが

あつたでしょ。

それを思い出したら、この鳥居も登っちゃうんじゃないかと思って「この歳で、そんなことするわけないだろ……えっ!？」

彼女は驚きの表情でぼくを見る。

「悠希ちゃんでしょ。 小学校2年のときに転校していった」

「うん」

彼女はこくりとうなづいた。

ぼくは子供の頃、日頃気の強い悠希ちゃんが、うんといってうなづく姿が可愛いと思っていた。

照れくさくなつて、ぼくは一人で鳥居をぐぐり抜けようとした。

彼女がぼくのシャツの裾をつかんだ、それは子供の頃、ぼくが悠希ちゃんにしていたことだった。

ぼくはそつと彼女の前に手を差し出す、それはいつも、彼女がぼくにしてくれたこと。

彼女はぼくの手に触れかけて、すぐに下ろした。

一瞬触れた彼女の手はとても冷たかった。

夏祭りといつてもまだ五月、日が照っていない今日は寒い。

約束の時間よりかなり早くから来ていたのかもしれない。

本殿の前には数名の人がお賽銭を上げ、鈴を鳴らしていた。

一度お参りを済ませたあと再び悠希ちゃんはお賽銭をあげた。

二回のお参りを済ませた彼女にその理由をぼくは尋ねた。

「二回目はお礼さ」

「お礼？」

「お願いするまえに願い以上のことが叶っちゃったから」

そう言った彼女がやけに女の子っぽくって、なぜだか人ごみの中を歩くほどの速度が少し速まった。

「ひとつちょうだい」

綿菓子屋のおじさんに彼女が声をかける。

「自分で作ってもいい？」

「それは……」

「いいじゃん、お兄さん、お願い！」

手を合わせて拝んだ。

彼女はどんなに年上の人であろうとお兄さん、お姉さんと呼ぶ。

子供の頃、それが大人には受けていた。

「しょうがない、可愛いお姉ちゃんの頼みだ」

「やった！」

子供の頃、綿菓子機のおもちやを取り合って作ったことがある。

真中にある金属で出来た円盤状のものの中にザラメを入れる。

熱くしすぎると糸にならずに回りの枠に溶けた砂糖がこびりつく。

失敗しながらもうまくいったときには、二人で棒までしゃぶった。

昔取った杵柄か、悠希ちゃんは器用に砂糖の糸を棒に絡め取っている。

「上手だな、姉ちゃん」

「えへへへ」

「少し手伝っていかないか？」

「兄さん、野暮はいいつこなしよ。こつちとら逢引の途中よ」

「そりゃ失礼したね、姉さん。楽しんでくれよ」

「あいよ」

綿菓子を頬張りながら歩き出した彼女の後ろを追った。

「あいかわらずだね」

「うん？」

「なんでもない」

「望も食べる？」

「ありがとう」

差し出された綿菓子を少しつまんで口に入れた。

今まで膨らんでいた砂糖はぼくの口の中であっという間に溶けた。

消えていく綿菓子のように悠希ちゃんの関心は次々と移っていく。

「わー！ みどりがめだ！」

男の子が亀をすくっているところを何人かが眺めていた。

「あれって、でかくなると凶暴になるんだよな」

「えっ、そうなんですか？ 今取っているのうちの子なんですけど」

「す、すみません！」

ぼくは前から声をかけてきた女性に謝ると悠希ちゃんを引っ張ってその場を離れた。

「俺、営業妨害しちゃったかな？」

「そうみたい」

18・望 3 〰 祭り 2

悠希ちゃんは、戦利品の黒出目金と赤い三つ尾の金魚が入った袋を持ちながら、綿菓子を満足げに頬張ると帰り道をたどり始めた。

子供の頃、ぼくはなにをやっても悠希ちゃんにはかなわなかった。

唯一勝てるのが、金魚すくいだった。

金魚を飼ってもらえないぼくに代わって、悠希ちゃんはぼくの捕った金魚を持って帰る。

しかも、ぼくが沢山すくったなかから必ず黒いのと赤いのを選ぶ。

もらうのはその二匹だけ。

自分の分の一匹も捕まえない時にもらえる一匹は、絶対受け取らないのだ。

あの頃と変わらない。

しばらく歩くと人の数もまばらになってくる。

駅までは、まだかなりある。

「雨のサインだ」

悠希ちゃんが空を見上げる。

「えっ？」

「雨の匂いがする。もうじき雨が降る」

そう言えば、子供の頃悠希ちゃんは、雨の前によく言っていた。

雨が降り出すときは、スツとする水の香りに混じって埃っぽい匂いがする、悠希ちゃんはその匂いに敏感だった。

「まるでアマガエルだね」

ぼくは、あの頃の言葉を思い出した。

「ゲロゲロー」

昔のように彼女はカエルの鳴き声をまねた。

辺り一面、黄色いフィルターをかけたようになる。

二人で空を見上げる。

『一番最初に落ちてきた雨粒にあたると妖精に会えるんだって、だからぼくが悠希ちゃんに妖精を捕まえてあげるよ』

子供の頃、ぼくはそんな御伽噺を真剣に信じていた。

結局、一度も妖精に出会うことなどなかったけど。

空が白く輝くと、ドラムを叩き壊したような大きな音がする。

「へー、望、怖がらなくなったんだ」

「いつまでも子供じゃないよ」

「頼もしいね」

その言葉が、くすぐったかった。

「あたった!」

同時に声を上げた。

ポツ

ポツ

ポツ、ポツ

バラバラバラ

二人の声が合図だったかのように、雨粒が天からいっぱい落ちてきて次から次へと音をたてる。

彼女はぼくの手を握ると走り出した。

雨音と彼女の下駄の規則正しい音に対して、ぼくの心臓は不規則なリズムを打っている。

神社から駅へ行く途中にあるぼくのマンションへ飛び込んだ。

だれもない家の鍵を開けてぼくたちは中へ入った。

小学校以来、友達を家に上げたことはない。

ぼくはぬれた彼女の浴衣にアイロンをかけていた。

「へー、そんなこともできるんだ」

「アイロンぐらい誰だってやるでしょ」

「悪いけど、俺やんない」

「そんなんじゃない、いいお嫁さんになれないよ」

「いいよ、結婚しないから」

顔を上げたぼくの目に、シャワーを浴びバスタオルを身にまとった彼女の姿が飛び込んだ。

「えっ……着替えあつたでしょ」

「だって、下着も濡れちゃったんだもん」

眼のやり場に困ったぼくは、浴衣に眼を戻そうとしたその時、彼女の行動に言葉を失った。

なんと、ドライヤーでショーツをヒラヒラさせながら乾かしている。

「あ、あの、そんな格好でリビングにこないでよ。ぼくも一応男なんだし」

「あつ、欲情した？」

「そんなわけないでしょ！どこに下着をドライヤーで乾かしてる女に興奮する男がいる？普通ひくでしょ」

「ならアイロンかけてよ」

浴衣の上にレースのついたピンクのショーツが置かれた。

「そついう問題じゃないでしょ！」

「なに怒ってんの望。子供の頃はなんでも言つこと聞いてくれたじゃん」

「どうでもいいから、早くこれどけて」

「はい」

アイロンをかけ終わる頃には、しばらくしていたドライヤーの音もやんでいた。

ぼくが、顔を上げるといまだにバスタオルをまとったまま彼女が、床の上に女の子ずわりをしている。

正座から左右に足を開きお尻を床につける男にはきつい体勢だ。

「いいね、こついつの」

「なにが」

「恋人同士、みたいな感じでさ」

「普通はアイロンかけるのって逆じゃないの」

「そんなことないさ、それに……」

「こんなところ、悠希ちゃんの大変な人に見られたら大変だね」

彼女には自分を犠牲にしてまで助けたい人がいるって、ひさびさに会ったとき言っていた。

「それより、おばさんたちが帰ってきた方がまずいんじゃないの？」

「今日は二人とも帰らない。結婚記念日だからね」

「へー、二人でお祝い。今でも仲いいんだ」

「まあね。悠希ちゃんのところは？」

「悠希でいいよ、ちゃんの子供みたいだ」

「悠希……のうちは」

なんだか、“ちゃん”を取り除いただけで、ぼくたちの関係が変わってしまったようで変な気分だった。

「俺んところは、普通かな。仲がよくもなければ悪くもない」

なぜか意外な気がした、悠希の口から普通という言葉が飛び出してくることが。

今まで会った人の中で、彼女ほど普通の似合わない人間はいない。

「はい、これできたから」

浴衣を彼女に渡した。

「あつたかい、望のぬくもりだ」

「アイロンのね。 どうでもいいけど、早く着替えてくれない」

「あいよ」

「なっ、なんで、ここで脱ごうとするの!」

「べつにいいじゃん、どうせおまえの身体なんだし」

「なに言ってるの」

その場で着替え始めそうな彼女に、ぼくは背を向けて、眼を閉じた。

「なあ、覚えてないの、望。 小さい頃に俺が言ってたこと」

ぼくは黙っていた。

彼女との想い出はあまりにいっぱいありすぎて、どれのことを言っているのか分からなかった。

だが、ふとある言葉がぼくの口について出た。

「俺が望で、望が俺」

悠希が時々呪文のように言っていた。

「おっ、それぞれ」

白い光の玉の夢。

彼女に再会してから見るようになった。

そういえば、小さい頃もよく見ていた。でもそれは、悠希に洗脳されていたからだと思う。

子供の頃、彼女によく“望が間違えて俺の身体に入っちゃったから、仕方なく俺は望の身体に入っただ”と言われた。だから、本当は、自分が男でぼくが女に生まれるはずだった、そう悠希は不満を漏らしていた。

幼い頃のぼくはその話を鵜呑みにしていた。

悠希ちゃんが言う事なのだからきつとそうに違いないと疑わなかった。

それに、大人たちもよく言っていた、悠希ちゃんが男の子で望ちゃ

んが女の子だったら良かったのにね、と。

「俺……約束守れないかもしれない」

「…………約束って？」

「お嫁さんにしてやるって」

「そんな事？ そんな小さな頃の話し覚えてないよ」

「だよな」

「第一、男のぼくが、お嫁さんになれるわけないし。それにさ」

「瞬ぼくは、言いよどんだ。」

「きみには大切な人がいるんでしょ。だからさ、そんなこと気にしなくったっていいよ。きみがさ、現れなかったらきみの事なんてすっかり忘れていたわけだし」

「そうだ、実際、彼女に再び会うまで彼女の事はすっかり忘れていて、思い出しもしなかった。」

「でも、他に言い方があったはずだ。」

「子供の頃の約束なんて、覚えてるわけないよな。覚えてたとしても、本気になるわけないし。それが大人になるって事だよな」

「きみこそ、好きな人ができたんでしょ」

「焼きもち焼いてくれるの？ 脈あり？」

「そんなわけないでしょ、きみなんてぼくのタイプじゃない」

「じゃ、どういう人が好み？」

「それは……優しくて、控えめで、女らしくってさ、きみとは正反対な人」

「この間のラブレターの彼女とか」

「彼女は……」

彼女に言われるまで、すっかり桜木さんのことを忘れていた。桜木さんの手紙には今日の6時に神社でと書かれていた。

手紙を読んだ後に、断ろうとしたが彼女とは連絡をとることができなかった。

時計は、もう6時45分をさしていた。

桜木さんは、まだまっているのだろうか？

「お似合いじゃん、付き合えば」

「そうだね、きみよりずっとぽんた女の子らしくていいかもね。」

19・悠希 3 雨

五月に行われる日枝神社のお祭りは、よく雨が降る。

雨乞いのお祭りだからだと、母さんから聞いたことがある。

子供の頃は、お祭りに降る雨は嫌いだった。

せつかくの屋台見物も雨が降ったら台無。

けど、今日の雨は恵みの雨。

望の家で二人の時間をもてたから。

逢う前は少しでも一緒に過ごせれば、それだけでいいと思ってた。

なのに、会えば会うほどずっとそばにいたくなる。

離れられない。

こんな気持ちになるなら逢わなけりゃよかった。

逢わなかったら

来週は検査入院がまっている。

簡単な手術で組織を調べるらしい。

その結果が最悪の場合、死を覚悟しなくてはいけないかもしれないって。

そうならもう望に逢えない。

そんなの耐えられない。

だけど、それは望のためなのだからと、ジレンマに陥る。

病気のことを望に話してしまえば楽になれるのだろうか。

そんなことをしたら、望を苦しめるだけ。

せめて、望との楽しい時を刻もうと思っていたただけなのに。

一緒にいればいるほど好きになっていくのに、心は、どんどんすれ違う。

絶対交わることはないの？」

「悠希の方こそ、自分の命より大切な人がいるんでしょ」

それって望のことだよ。

どうしてひとこといえないんだろう。

子供の頃は、素直にすきっていえたのに。

「焼きもち焼いてくれるの？ 脈あり？」

なんだかひねてる、俺。

「そんなわけないでしょ、悠希なんてぼくのタイプじゃない」

「じゃ、どういう人が好み？」

「それは……優しくて、控えめで、女らしくって、悠希とは正反対な人」

「この間のラブレターの彼女とか」

「彼女は……」

そのとき、初めて、望が時計を見た。

なんかさ、取り残された気分だったよ。

「お似合いじゃん、付き合えば」

幸せにね。

死ぬかもしれない俺なんかよりも、彼女の方が望のため。

素直じゃない。

「そうだね、きみよりよっぽど女の子らしくていいかもね」

否定してよ。

「俺、帰る」

「ぼくもこれから出かけるから、駅まで送っていくよ」

引き止めてくれないんだ。

だよな。

俺がどんなに思っても、望の心が手に入らないのはわかってる。

なんか、そんな気がしてた。

生まれた時から。

俺はずっと片思い。

きつと、生まれる以前から。

外へ出たとき、もう雨はやんでいた。

心は天気とは裏腹、雨が降り出した。

マンションの前で望に見送られると、駅の方へ歩き出した。

しばらくして振り向くと、駅とは反対方向に駆け出す望の姿が見えた。

望の後を追って駆け出していた。

慣れない下駄の上に浴衣の裾が絡んで走りにくい。

なぜ、俺、追いかけているんだろう？

どうしたいんだろう？

神社周辺は、望と歩いた時よりもっと人が増えていた。
歩くがやっと。

望を捜して鳥居まで来ると、望と浴衣姿の少女が境内の人ごみへと
飲み込まれていくところだった。

ラブレターの彼女と？

どうして？

俺と約束の日に彼女とも？

今までの楽しかった時間が核爆弾で一気にぶっ飛んだ。

望

変わってしまったの？

お参りをした後、二人は楽しそうに屋台を見て回る。

金魚すくいのところで彼女が立ち止った。彼女は金魚すくいをするつもりらしい。

望にもいっしょにやるように勧めている。

二人だけの大切な思い出が消えていく。

俺のつかんでいる袋の中に、さっき望の捕ってくれた金魚が泳いでいる。

子供の頃、スポーツでは俺に何一つ敵わなかった望。

唯一俺に勝てるのは、金魚すくい。

いつも一匹もすくえない俺に代わって、望がたくさんすくってくれる。

なのに、何匹捕っても屋台のおじさんは、二匹しかくれないのが悔しかった。

かといって自分が一匹も取れなかったのを思い知らされるように泳ぐ自分の分の一匹をもらうのも嫌だった。

それに仲間はずれを出すのも気が引けて、望の二匹だけをいつももらって帰った。

彼女は結局一匹もすくえなかったらしく、おまけでもらえる一匹をもらっていた。

望のすくった金魚はいない。

思い出は、わずかのところで消えなかった。

俺が連れている二匹の金魚が、なんだか誇らしげに泳いでいるように思える。

俺、何してるんだ？

望の後をつけるなんて。

こんなよくない。

だけど

二人は川沿いを歩いて行く。

神社から離れてくると、徐々に人通りも減ってきた。

しまいには、前に行く望たち二人と放れて歩く俺だけになっていた。

彼女が望の腕に手をまわした。

望はあわてた様子で腕を引き抜こうとした。

彼女に何か言われてやめた。

しばらく腕組みをしたまま歩いていた二人は、立ち止ると見詰め合った。

あまり背の高くない望だが、彼女はさらに背が低い。

彼女が背伸びをした。

やっぱりだめだ、そんなの……

金魚の入った袋の紐が俺の手をすり抜けて落ちた。

かすかな音に気付き横を向いた望の頬に彼女の唇が触れた。

19・悠希 3 〵 雨（後書き）

大変ご無沙汰しました。

春に書いていた話が、載せるころには秋もめちゃくちゃ深まっ
てしまいました。

これからもよろしくお願いします。

よろしかったらブログにも遊びに来てください。

更新はのろいですが……

<http://ihoriseesaanet/>

20・悠希 3 く俺も男? (前書き)

ご、ごめんなさい。11話との設定にずれが生じていたことに気づきました。(^^;、

そこで、11話とこの20話、若干変更させていただきました。

20・悠希 3 く俺も男？

ただ歩いていた。

その場から立ち去りたくって

どのくらい歩いただろう。

突然の激痛と足のもつれでその場に倒れた。

「大丈夫？」

痛みのためにしばらくは、声をかけられたのもわからなかった。

「痛む？」

肩に触れた手で、人がいることに始めて気がついた。

少し遠のいた痛みをこらえながら顔を上げた。

「朝霧先輩、な、なんで？」

「私の家、ここ」

ありえねえっていうほど立派な門構えの家だった。

「先輩つてやっぱ、お嬢様だったんだ」

「そんなバカ言えるなら大丈夫ね。怪我の手当てしてあげるから上がって」

先輩の部屋はシンプルだった。

本棚に机、窓際のベッド。

部屋の中央に敷かれた白いふかふかのラグの上には、丸いガラステーブル。

どれもこれもかなり大きくて立派なものだ。

俺の部屋には、入りきりそうもないほどだ。

これだけの家具が揃っていながら、閑散として見える。

本棚には、医学書が沢山並んでいる。

そういえば、医者を目指してるって聞いたことがある。

ご両親も医者だとか。

「女らしくない殺風景な部屋でしょ」

「いえ、そんな、女の子らしい…です」

語尾があいまいになっていた。

「おやじくさいって思ったでしょ」

「うん」

頷いてしまってから、急いで付け足した。

「あつ、でも、俺の部屋に比べたら、ずっと女らしいです」

「無理しなくともいいわよ」

「俺の部屋、散らかってるから、みんなに男みたいだつて」

「悠希の部屋、入ってみたいな」

「じゃあ、片付けときます」

「それじゃ意味ないでしょ」

「ん？」

「散らかり具合を見てみたいんだから」

「先輩って悪趣味」

あまりに整ったハーフっぽい顔の朝霧先輩は、大人っぽくって近寄りがたく見える。

けど、今みたいに笑っている時は、ちょっと幼く見えて、かわいくって、親しみやすい。

男ってこういうギャップにほろりといっちゃうんだろっな、ツンデレとかさ。

案外と、先輩ってそれかもね。

普段はきりつとしていて、しっかり者でかっこいいけど、恋人と二人つきりになったら、ゴロニヤーンて擦り寄っちゃったりして。

うっ、変な想像しちまった。

「もう痛くない？」

「わあ！」

「なに驚いてるの？」

落ち着け、落ち着け。

「先輩に傷の手当してもらったから、平気です」

「そうじゃなくって」

先輩は口ごもる。

「ありがとうございます。もう帰ります」

急いで立ち上がろうとしたところ、手をつかまれた。かなり強い力で。

「病気のこと、顧問から聞いたわ」

「えっ、あつ、そのこと。大した事ないです。」

検査してみなければわからないし、なんでもないってことになりま
すよ、きっと」

「そうね」

そんなに心配げな顔をされたらなんて言ったらいいのかわかんない
よ。

「こんなところ他の人に見られたら殺されそうですね」

話題を変えようと口をついて出た言葉がこれかよ。

「先輩、人気あるから」

「悠希だつて」

「桁が違います」

「そんなことないわよ」

「先輩の親衛隊、迫力あるし」

「ごめんなさい」

「いえ、先輩責めてるわけじゃ」

「私のせいで、いじめられてるんですよ。退部のことだつて」

「先輩のせいじゃないですよ。俺、生意気だから」

「そんなことないよ、可愛いもの」

「照れちゃうな」

声を立てて笑ってみたけど、先輩のマジな顔見たらひきつってしま
った。

なにドキドキしてんだ
俺には望がいるんだぞ。

なんか望と二人っきりのときよりもやばいかも。
どういうことだよこれ。

「彼氏と何かあったの？」

「彼氏って？ いないし」

「彼氏じゃないんだ」

「？」

「今日、見ちゃった、二人仲良く歩いているの」
見られてたんだ。

「あんなに楽しそうだったのに、さっきの悠希は辛そうだった」
「望とは幼なじみで。俺の片思いなんです」

望のことは親友のナオにも話したことがなかった。

今までは、完全に心のずっと奥に閉じ込めておいたから。
でも、今はだれかに話したい気分。

今までのいきさつをかいつまんで話した。

ただ、入れ代わって生まれたとかそういう部分は省略した。

話をややこしくするだけだし、先輩に変なやつと思われるのも嫌だったから。

「どうして、今まで会いに行かなかったの？」

「引越してすぐ、望の家に行ったんです。最初は望も彼の家族も大歓迎してくれて。俺も望の家は居心地がよかったからうれしかったんだけど」

もうずいぶん前の話だけど、思い出すと胸が痛む。

本当の両親となるべきだった人達と望に逢えて俺は舞い上がっていた。

望の両親もすごく嬉しそうで、俺、調子にのっていた。

その時、望がどんなに淋しい思いをしていたかなんて考えなかった。

『ぼくのおかあさんとお父さんを取らないで』

望はあの日俺にそう言った。

望と俺が入れ代わったことによる両親との歪を感じたのか。

それともただ単に、望の両親に大歓迎された俺に焼きもちを焼いただけかもしれない。

どちらにしろ俺は、ただ、望に嫌われなくなかった。
愛されたいと思う以上に嫌われなくなかった。

嫌われてしまったら、俺の存在理由が無くなってしまつような気がして。

逢いに行くのをやめた。

逢いたかったけれど、その気持ちに封印して。

「好きになつてもらつ以上に、嫌われるのが怖くなって。
だから、逢いにいけなかった」

自分でも声が少し震えているのがわかる。

「死ぬかもしれないって思つたら、望のことしか浮かばなくて」

背中に先輩のぬくもりを感じた。

優しく先輩の腕に包み込まれた。

「忘れればいい」

耳元でかすかに空気が震えた。

「なにもかも」

この状況に戸惑いを覚え、ますます俺の脈は早まった。

先輩の手を無理やりほどくわけにもいかないし。
いやじゃないし……

なんだ、このもやもやするのは
これって、男の本能？
なんてやつだ俺って
望をこんなに想っているのに

心と生理現象は別って

いやってほど
俺も男？

自己嫌悪

しばらくすると、ときどき感から安らかな気持ちになってゆく。

こうしていると、何もかもなかったような気がする。
赤ちゃんに戻ったようだ。
赤ん坊に戻れたら。

だけど、望を想う気持ちは消えない。

だって、生まれる前から望が好きだから。

このままずっとこうしていたい。

そうじゃない

本当は望を抱きしめたい

望を感じていたい

やっぱ、望が一番で

「あー！ 帰んなきゃ！」

「具合がよくなったら部に戻ってらっしゃい」

すぐに返事を返すことが出来なかった。

「退部届け私が預かっているから。私が卒業するまでにね」

笑ってごまかした。

なんて、答えていいのかわからなかったから。

玄関で別れを告げる頃になって、現実を引き戻された。

「あのー、駅までの道、教えてもらえますか？」

イケてねえー！

21・望 4 金魚

黒と赤

金魚

バケツの中

泳いでる

ぼくの

落とした

パンくず

丸い口に

吸い込まれた

「金魚なんてどうしたの？」

父と一泊して帰ってきた母が尋ねた。

「金魚すくい」

「めずらしいわね。何年ぶり？」

「8年、かな？」

「ああ、お隣の悠希ちゃんが引越してからね、ふふん」
母の口をついてでた悠希の名前にドキッとした。

「意味深な笑い、気持ち悪いな」

「だれと金魚すくいしたのかな？」

「いいでしょ、だれだって。それより、飼ってもいい」

「いいわよ」

「ほんとに？」

「ええ」

「金魚だよ」

「いまさら何念押しているの？」

「いままでもいろんなの飼ってたじゃない。」

「まあ、金魚だけは、いつも悠希ちゃんにあげてたみたいだけど」

「そういえばそうだ。」

「なんで金魚だけ悠希にあげていたんだ？」

「金魚すくい」

「それは唯一悠希に勝てる、ぼくの男である証だった。」

「金魚すくいが男の証なんて大げさだけど、」

「当時のぼくにとってそれはすごく重要なことだった。」

「男としてのプライドが保たれたのだ。」

「あやふやな記憶の中で」

「悠希は勝手にぼくのすくった金魚の中から黒と赤を選んでいた。かたえくぼを作って笑う悠希の顔を見ると、幸せだった。」

悠希が引越していった時

金魚すくいには、ぼくにとって意味をなさなくなった。

男の証もプライドもかたえくぼも

みんな消えてしまったから。

「悠希ちゃんどうしてるのかしらね」

「悠希ちゃんか……」

いままでそばで新聞を読んでいた父が呟く。

「双子に間違われるぐらい、いつも一緒にいたのにね。」

実際、同じ日におなじ病院で生まれて、まるで他人とは思えなかったわ」

母は、含み笑いをした。

「男と女の性格がまるつきり反対で、男女よく間違われていたわね。今でも望は女の子みたいな所があるけど」

「うるさいな！」

自分の一番気にしている所を指摘されて、ぼくはむっとした。

「一人で尋ねてきた時以来逢ってないけど

きつと素敵なお嬢さんになっているでしょうね」

父は新聞に眼をやったまま頷いている。

悠希の話題になってから父は、ぼくたちの話をずっと聞いていたのだ。

「少しも変わっていないよ、男みたいな性格」

ジエットコースター娘を思い出して言った。

「やっぱり逢ったんだ」

「いや、性格なんてそんなに変わるものじゃないと思ってさ」

隠すほどのことでもないのに、なぜか彼女に逢ったことを言い出せなかった。

22・望 4 病気

「望！ 悠希とデートしたんだってな！」

ものすごい剣幕でまりちゃんがぼくの教室に怒鳴り込んできた。

「好きなのか！」

ぼくの胸倉をつかむ。

「そ、そんなんじゃないよ」

「じゃあ、俺が悠希と付き合ってもいいんだな」

「彼女がよければ、いいんじゃない」

「ホントだな。 後から口出しするんじゃないぞ」

「はい。 でも……」

「なんだ！」

もともとドラマの刑事かヤクザと紙一重の怖い顔に凄まれて、次の言葉を口にしていいものかますます迷った。

「まりちゃん」

「その名で呼ぶな！ なんだ、新堂か」

「そんなおっかない顔で脅したら、いいたいこともいえなくなっちゃうでしょ。 ねえ、望くん」

ぼくは小さく、でも素早く頷いた。

胸倉をつかんでいるまりちゃんの手を見てから、おそろおそろ視線を顔に移した。

「ほーら、その顔」

まりちゃんは、副会長の緊張感のない声に手を下ろすとそっぽを向いた。

開放されたばくは、少しずつ後ずさりをしながらまりちゃんの手が届かない範囲まで離れた。

「何かいいたいことあるのでしょ？」

ばくはうつむいた。

「いうべきか、いわざるべきか？」

昔、まりちゃんが悠希を好きだっていうのは、小さかったばくにもばれられたった。
なんに対してもストレートな彼が、悠希にだけはコクらないのが当時不思議だった。

そんな彼にいつていいものか？

「こういう男には、はっきり言っておいたほうがいいよ。単純なわりに、恋愛に関してするする引きずるタイプなんだから」

「うるせえ！」

「あのー、彼女には好きな人がいるらしいです」

「おまえだろ」

「自分の命より大切な人がいるって」

「だからおまえ」

「違うと思う」

「デートしたんだろ？」

「あれは、傷心デートで」

「なんだそれ」

「彼女の好きな人がはっきりしないから彼女の傷ついた心を癒すた

めというわけで」

「どあほう、傷つけた張本人が、傷心デートしてどうすんだよ。ただでさえ悠希、傷ついてるのに」
押し殺した声が、胸に響く。

「病気なんだ、死ぬかもしれない」

死？

「検査してみなけりやはつきりしないけど、もしかしたら命にかかわるかもしれない」

悠希が…

「…だから？」

死ぬかもしれない？

「ぼくにどうしろっていの？」

まりちゃんは、眼を見開いてぼくを凝視する。

「ぼくは医者でもなんでもない」

言葉は淡々と口からこぼれ出た。

心は彼の言葉を理解しきれていなかったから。

「わかった。」

悠希は絶対におまえだけにはわたさない!!」

ぼくの側にあつた机を蹴飛ばすと彼は教室を出て行った。

副会長は肩を落とすとゆっくりと左右に首を振ると彼の後を追った。

ぼくらのやり取りに聞き耳を立てていたクラスメートたちも、先生が入ってくると急いで席にもどっていった。

23・悠希4　むくわれない想いに

「かあさんて、ふられたことあるの」

「まあね」

横で洗濯物をたたみながら母さんが、さらりとかえす。

「いいい。ふったことあっても、ふられたことなんてないのかと思
った」

「ありがとう」

「誰にふられたの？」

「ないしょ」

かあさんは微笑んだ。

俺は、洗濯物の山からトレーナーを取るとたたんでみた。
びっくりした顔でかあさんは、俺を見た。

「な、なにも、そんな、おどろかなくったって」

急に母さんは含み笑いを始めた。

「気持ち悪いなあ」

「だってねえ。なにがあったのかなって」

「なにもないよ」

「今度、望くんを連れていらっしやい」

「いきなりなんだよ」

「最近、悠希が変わったのって、望くんのおかげでしょ」

「変わってねえよ」

「望くんがお嬢さんに来てくれたらうれしいわね」

「ありえないって、だって俺……もう、会わないから」
「なぜ？」

「望の迷惑だから」

「そう」

「そうって、他に言いようないの？」

「迷惑なんでしょ？」

「べつに、望がいったわけじゃないよ」

「でしょうね、あのこは悠希を傷つけるような言い方しないでしょ、ほかのこにならわからないけれど」

「ほかのこって？」

「望くんて、誰にでも優しいようできて意外と冷たいところがあるのよ」

そうかもしれない。

小学校のときも、バレンタインにほかのこからもらったチョコを相手に返していた。

まわりに誰がいようがお構い無しにだ。

しかも “ もらう理由無いから ” たったこの一言を添えただけなのだ。

なかには泣き出してしまうこもいたけれど、この時ばかりはなんの慰めもなく立ち去っていく。

ほかの子には悪いけど

そんな望の態度、俺はうれしかった。

俺はバレンタインにチョコをもらうことがあってもあげることはいなかった。

俺は男だからといきがっていたけど、本当はこわかったのかもしれない。

望にとって自分もほかのこたちと同じだったら……

俺とかあさんがのどかなひと時を過ごしていると、まりがやってきた。

神妙な態度のまりを部屋に通した。

俺はベッドに腰を下ろした。

まりは俺の部屋に来たときの定位置、学習机のイスに腰掛けた。といっても、最近はいせいでメールのやりとりぐらいで、部屋にくることはなかった。

「まり、話ってなんだよ」

「まりって呼ぶな」

「そんなこと？　ただでさえ怖い顔なのに、真剣な顔してるからなにかと思った」

「なあ」

真理は右手を軽く握って人差し指を親指ではじいている。

何かいいにくいことがある時、決まってこのしぐさをする。

単純でわかりやすい。

ほっといたら何時間でもそうやっているかもしれない。
身体はでかくせに意外に気は小さい。

「何がしたいんだよ」

まりはたぶん望のことで来たのだ。

俺が望と逢ったのを知ってから、頻繁にメールをよこす。
そんなにまめなやつじゃなかったんだけど。

「悠希が望のことを好きなのはわかってる」

そんなことはみんなが知っている。

子供の頃、望が好きなることを公言してはばからなかったから。

「だけど、あいつはどうなんだ」

「関係ない」

「関係なくないだろ」

「俺が好きだから、それだけでいい」

「よくない!」

真理は立ち上がると俺を睨んだ。

「声でかすぎ」

「す、すまん」

俺の隣にゆつくりと腰を下ろし、真理はうつむいたまま再び指をはじき始めた。

「まりは相手が自分を好いてくれるから好きになるの?」

「そ、それは」

「自分の気持ちは、相手の気持ちと関係ない」

真理が一番わかってるはず。

いきなり俺を真理は抱きしめた。

「なにすんだよ!」

あわてて真理の手を振り解こうとするが、真理の身体はびくともし

ない。

いつの間にこんなに遅しくなったんだろう。

「俺はおまえが」

俺は動きを止めた。

「……すぎだ」

大きな図体からは想像がつかないほどか細い声だった。

真理の気持ちには、子供の頃から気がついていた。

けど、いつも彼の言葉をさえぎって、その言葉を聞くのを先送りにしてきた。

聞いてしまったら今までの関係が壊れてしまいそうで。

なのに、今、俺はさえぎらなかった。

「あいつのことは、忘れる」

なんで、真理の言葉を止めなかったんだろう。

「だめか？ 俺じゃ」

厚い真理の胸の中で、なぜだか涙が溢れてきた。

真理のＴシャツを濡らしてしまったのではないかとわずかに顔を離した。

真理の顔が迫ってくるのを感じる。

やばい。

いきなり下げた俺の頭が真理の顔面を直撃した。

「いてえ！」

真理が悲鳴をあげた。

「ご、ごめん」

「ゆるさねえ」

「だ、だって、し、真理がわるい！」

真理は顔を赤くした。

色黒だから赤くなったのかは定かではないが、やましいところがあるのか、一瞬たじろいだのだ。

しかも、俺が『まり』ではなく『しんり』とよんだことにも気づかないほど動揺したのだから。

「あ、あのさあ、来週から検査入院だって」

「まあね」

「話さなくっていいのか？」

「誰に？」

「いや、いいんだ」

「望には関係ないだろ」

「そのために、逢いにいったんじゃないのか」

「逢いたくなつたから逢いにいった、ただそれだけ」

真理は眉間に皺を寄せる。

「病気のことってどうなるわけじゃないし」

真理に視線を向けると彼は顔を背けた。

「そ、そうだよな。い、いわないほうがいいかも。

無駄な心配かけるのもよくない。

今回はただの検査入院だし、なんでもないってことになるさ、きつと」

棒読みなセリフ。

俺は真理の頭に左腕を回し、思いつきり右手で最近伸ばし始めた髪の毛がくしゃくしゃになるほど頭をなでてやった。

「や、やめろよ」

「真理ってほんといいやつだよな」

「今頃気づいたか、

って、今、なんていった」

「二度といわねえ」

「名前、よんだよな」

「さあね」

「なあ、なっ、もう一回」

手を合わせて俺を拝む。

「そんなことより、絶対望にはいっくなよな」

「そ、それは……」

「命令だ！」

「……いった」

「なに？」

「病気のこと、あいつに話した」

「なんで。望が傷つくじゃないか」

「あいつは悠希のことをなんとも思っちゃいないんだ。だから、忘れろ」

「わかってる」

今にも泣き出しそうなぐらい顔をくしゃくしゃにして真理は俺を見つめる。

俺の心を鏡で映したらきつと今の真理の顔と同じかもしれない。

真理の今の気持ちを俺が一番わかっていて、

俺の気持ちを世界中で最も理解しているのが真理だ。

「俺たち、バカだな」

俺は苦笑した。

想っても想っても振り向いてもらえないのはわかっているのに。

真理を見ていたらなんだか自分がかawaiiそうになって。
自分をそんなふうにいままで思ったことなかったのに。

真理のことが好きだったら
どんなに楽だろうね。

俺は優しく真理の頬にキスをした。
彼と俺の報われない想いに。

24・悠希4 ひとめぼれ

「ひどいよ！ 悠希！ なんでいつてくれなかったの」

俺の唇が真理の頬にかすかに触れたとき、大きなドアの開く音と同時にナオの怒鳴り声がした。

真理はドアが開くと同時に立ち上がった。

「あつ」

かすかな声とともに開かれたナオの口はしばらく閉まることはなかった。

「こいつ、従兄のまり、いや、真理しんり」

「はじめまして、小向ナオです」

「あつ、どうも」

二人ともなんだかぎこちない。

真理はともかく、人見知りしないナオの様子までなんとなくおかしい。

ひょっとして、見られたのか？

「じゃ、俺、失礼します」

「もうお帰りになられるちゃうのですか？」

なんだ、この変な敬語は？

「はい」

「残念ですわ、せっかくお会できましたのに」

「失礼します」

まるでロボットのようなギクシャクした動きで真理は出て行った。

「ごきげんよう」

満面の笑みをたたえてナオは見送った。

「さすが悠希、あんなかつこいい人が従兄にいるなんて。ああ、あたしも欲しいな」

しばらく呆けた顔をしていたナオが、早口でまくし立てた。

「かつこいいねえ……」

そういえばナオはゴリラタイプが好みだったっけ。

「悠希！ どうして黙ってたのよ」

いままでハートだったナオの目が、いきなり細くつりあがった。

「真理のこと？」

「それもあるけど、じゃなくって、勝手に部をやめちゃったこと、それに病気のこと隠してたなんて、あたしたち、親友じゃないの！」

「ごめん」

「あんな嫌がらせぐらいで大好きなバスケやめちゃうなんておかしいと思ってたんだ。」

ねえ、検査でなんでもなかったら、部に戻ってくるんでしょ。顧問もみんなも心配してるよ」

「うん」

「だったら明日、退部届け撤退に行こうね」

「それは」

「まあ、大変な病気の可能性もあるから悩むのはわかるけど、ねっ、いいほうに考えようよ。」

そうだ、朝霧先輩に相談しようよ」

「ううん」

朝霧先輩と聞いてなんだかドキツとした。

あの時、先輩の自分に対する気持ちをなんとなく感じちゃったから、すごく意識しちゃう。

それに、先輩のフェルモンにあてられたっていうか、次にあんなシチュエーションになったら俺、我慢できる自信ないし。

「決まりね。明日、朝霧先輩に相談するってことで」

「まった！」

立ちかけたナオの足にしがみついた。

うっ、なんてとこつかんでるんだ。急いで手を離れた。

「あ、あ、あの、検査結果がわかってからってことで……」

「そうよね、悠希も結果が出ないことには心配でほかの事考えられないよね。」

わかった、とりあえず保留にしてもらるように先生に頼んであげる」

「あつ、そのことなら」

「まかせなさいって。それより、従兄のシンリさん、彼女いないの？」

「たぶん……」

俺を口説こうとするぐらいだからな。

「じゃあ、今度セッティングしてよ」

「なにを？」

「合コンとか、その、キャツ、デ・ー・トとか」

「はあ？」

「それで、今回のことなしにしてあげる。よろしくね」

そういい残すとナオは帰っていった。
そして俺は、すでに退部届けは保留状態になっていることをいいそ
びれてしまった。

25・望 5 〵葬儀（前書き）

ラブホの話が出てくるのですが、なんたつて望と悠希ですからちつともエツチじゃない。

それでも気になる方は避けてください。

といって、期待されても困るのですが（f^^^）

25・望 5 〱 葬儀

まりちゃんから悠希が病気だと聞かされた次の日、彼からメモを渡された。

悠希の住所。

彼がどんな気持ちでぼくに渡したのか。

それをもっとそのままゴミ箱送りにはできなかった。

そうなの・か・な？

悠希の家へ近づくにつれて多くの喪服の人々を見かけるようになってた。

ぼくはだんだん不安になってきた。

道の両側に並べられた多くの花輪を目にしたとき、胸を締め付けられる思いだった。

おばさん？

多くの喪服にまぎれて悠希のお母さんがいた。

「ひょっとして、望ちゃん」

ぼくと目が合うと懐かしい声とともに近づいてきた。

「望ちゃんでしょ、弘前さんちの」

「お久しぶりです。この度は……」

お婆さんの後ろから現れた人影に言葉をあわてて飲み込んだ。

「よっ！　なに望、泣きそうな顔しての？　大石のお婆さんと知り合い？」

場違いな明るい声音ににぼくは細かく首を振った。

「もしかして、俺に逢いに来てくれたの？」

「まりちゃんが変なこというから」

「なんて？」

「あつ、いや」

悠希が亡くなったと勘違いした、なんて、本人前にしていえないよ。

悠希は耳元で囁いた。

「俺が死んだとでも言った」

心臓がバクバクした。

悠希の顔が近づいたからか、それとも、彼女の死というものを身近に感じたせいかな？

「俺、望と話あるからちよつと遅くなる」

「話なら家ですれば。わたしだって望ちゃんとお話したいもの」

「母さんは、まだ手伝い残ってるんだろ」

「ゆっくりしていったっていいじゃない、ねえ、望ちゃん」

「俺たちこれから行くところなの」

「そうなの？」

お婆さんは名残り惜しそうにぼくたちを見送った。

「どこ行くの？」

黙ったまま歩く悠希の後にぼくは続いた。

「身体の方はいいの？」

「まあ」

曖昧な返事をする。

彼女は後ろのぼくを気にする様子もなく、ただ歩いていく。

ぼくがこのまま立ち止まったとしてもそのまま気づかずに行ってしまふのだろうか？

にじんでくる涙を暗くなった空を見上げることでもかろうじて止められた。

なんだろう、この気持ち？

いきなり立ち止まった悠希の背中を目前にぼくも止まることができた。

「なあ望、望が嫌だって言うなら、俺、もう逢いに行かない。

だから、最後にひとつだけ頼みきいてくれる？

おれを覚えておいて」

「なにいつてるの」

そのときは、悠希の本当の言葉の意味を理解していなかった。

悠希にぼくは手を強くつかまれ派手な建物の中に引きずりこまれた。

「な、なにするんだよ！」

大声をあげたかったが、そんな雰囲気のところでもなかったのだから、こらえた。

「子供の頃、約束したじゃん」

うつむいて口をとがらせてぼそぼそしゃべる。

「約束なんかするわけないでしょ。ここって、あの…… いかかわしい場所でしょ」

「く、くつ、くつ、くつ、いかかわしい場所だって」

悠希はつぼにはまったらしく必死に笑いをこらえながら体中を震わせている。

「帰る」

「お・し・ろ」

「なに？」

ぼくの質問に対して一呼吸おいて、やっと笑いがおさまったのか悠希は話し始めた。

「望が子供のころ、『お城だ！』といってよろこんでた」

幼稚園の頃だろうか、ここができたのは。

両親に連れて行って欲しいといって断られたことがあった。今考えるとあたりまえなんだけど。

「俺にいったじゃん、連れてってってくれて」

そ、そういえばそんなことがあったかもしれない。

あの頃、親でだめなときは悠希に頼んでいたような気がする。

悠希はまるでぼくのスーパーマンだった。なんでもかなえてくれる。

だけどあの日は、あつという間に作戦は失敗した。

冒険だ！　といって勢いよく飛び込んだばかりは、すぐ従業員見つかってに追い出された。

大人になってからおいでって。

うん？

「あ、あれは」

悠希は首を傾げて、どきまぎしているぼくをみる。
このしぐさにぼくは弱い。

「俺、望との約束は必ず守る。お嫁さんにするのは無理だけど婿さんならいいよ」

「あたりまえでしょ」

「結婚してくれるの？」

「そうじゃなくって」

「望、部屋に入ったことある？」

悠希の話は、昔からコロコロネコの目のように変る。

「決まってるでしょ！」

「入ったことあるって」

「あるわけない！」

声を張り上げると同時に、中年の男女が入ってきた。

ぼくと悠希は、回れ右をするように後ろを向いた。

ぼくは学校帰り、悠希も葬儀ということで制服を着ていた。

ぼくたちのことを話しているらしいぼそぼそとした女性の声が通り過ぎるのを確認してから、ゆっくりとぼくは振り返った。

受付に立ち止まっている女性がちらりとこちらを見るのと視線が合った。

彼女は急くように男性の腕を引き消えていった。

「なあ、部屋、気になんない」
興味がないといったら嘘になる。

外観がこんなに派手なのだから部屋はさぞかし立派なのだろう。
「やつぱ気になるだろう。なつ、社会見学と思えばいいじゃん。みるだけだから。なにもしないよ」

うーん、男子が女子にいわれる言葉でないような。

まあ、ぼくと悠希の間はいつもそうだったのだけど。

「なつ、いいだろ」

甘えた声を出す。

悠希の言葉に押し切られる形で部屋を借りることにした。

部屋に入った悠希は首を一巡させると丸い大きなベッドにダイブした。

「うへー！ なにこのボタン」

ベッドのリモコンをいじくり始める。

「わっ！」

ベッドが回り始めたり、カラフルなライトが点滅した。

悠希は、ぼくを巻き込んでひとしきり遊んでいた。

しばらくして、暗い天井に一面の星を映しゆつくりとベッドが回る状態に落ち着いた。

彼女はベッドの真ん中で大の字になって天井を見つめている。

「のぞむ。俺をみてくれる？」

ぼくはベッドの端に正座をして星を見上げていたが、彼女のほうに目線を落とした。

「俺を覚えていてくれる？」

悠希はジャケットのボタンを外しブラウスのリボンに手をかけた。

「なにして#\$%&@*??!!!!」

悠希から視線を外した。

「望には覚えておいてほしいんだ」

「精密検査これからなんでしょ、だったら」

「傷が付く前の本当の望の身体」

「どうしてそんなことをいうの。」

ぼくを恨んでるわけ、ぼくの代わりに死ぬかもしれないから。だから今頃になって現れたの！」

悠希がそんなこと思っていないことぐらいわかる。

だけど、今頃現れて死ぬかもしれないなんて話を聞かされて、ぼくはどうすればいいの。

もし、悠希が昔いつていたようにぼくが間違えて本当の彼女の身体に入ってしまったのだとしたら。

本当はぼくが死ぬはずだった。

「きみが女の子になっちゃったのも病気になったのもぼくのせい」
悠希は困っている。

ぼくが困らせている。

沈黙が怖い。

さらにひどいことをぼくはいつてしまいそう。

「なんかさ、男だとか女だとかもうどうでもよくなった。俺は俺だし」

俺は俺だと言い切る悠希がうらやましかった。
ぼくはなんなんだろう。

「それより、この身体守れなかったことがくやしくなって……」ごめん
両腕で悠希は顔を覆った。

「だったら守ってよ……」
悠希まで届くかどうかのボリュームの声にはかすかなビブラートがかかっていた。

「最後まで守ってよ。
もとに戻るまで。」

いつだってそうなんだから悠希は！ 勝手に引っ掻き回してなにも
いわずにどこかへ消えちゃう。
引っ越していったときも今度だってきつと。

それに、
それに、

引越してすぐに遊びに来たときも黙って帰っちゃって」

いつ起き上がったのか悠希はぼくをみている。

「あれは」

「なに」

「望に嫌われたくなくて」

「どうして？」

「盗るな、っていったら」

「なにを？」

「おばさんたちを」

「えっ？」

「俺がおばさんたちと話してたら、不愉快そうにしないで、それから、盗らないでって」

そういえばそんなこといったかもしれない。

「だから俺、望に嫌われると思って」

「あ、あれは」

悠希とせつかつく逢えたのにお母さんたちとばかり話しているから。ぼくは悠希と話したかっただけなのに。

「なんだよ」

「あれは、その……」

口が裂けてもいえない。

「いつも、望を苦しめて、ごめん」

「そんなことないよ」

「俺、望をすきなだけなのにな」

「ぼく……」

「なあ、後ろから抱きしめてくれる？ あっ、い、いやだったらいんだよ、べつに」

悠希は顔を桜色に染め目線を合わさないようにした。
いつでも悠希の提案は唐突でぼくを驚かせる。

そして、いつもぼくはそれに逆らえない。

ぼくはおそろおそろ彼女の背中から両手を前に回した。
悠希の身体は一瞬強張ったが、力が抜けると細いわりに柔らかかった。

本当は、ぼくが入るはずだった身体。

悠希は生まれる前の記憶があるという。
ぼくが間違えて悠希の身体に入ってしまったと言っていたけれど、
それが本当か嘘かぼくにはわからない。
ただ、今、それは大したことはないような気がする。

「友だちがいったんだ。こうしてもらつと、女の子でよかったな
って幸せ感じるって」

「悠希は男の子なんですよ」

なんだか照れくさくって、わざと意地悪を言ってしまった。

でも、ほのかに伝わってくる暖かさは、ぼくのかたくなだった心を
少しだけ溶かしていくような、そんな気がする。

「い、いや、あの……だから、男だとか女だとかじゃあなくって」

「自分でいったんだよ、女の子でよかったって」

「それは」

悠希の顔は見えないけれど、彼女の口をとがらせて丸く膨らんだピ
ンクのほっぺたが目に見えかぶ。

ぼくはいつも、自分の居場所がここではないと感じていた。

それは子供の頃悠希がいつも『ぼくが男で望が女の子だよ』そうい
ていたせいだと思っていた。

それも、今は違う気がする。

自分の居場所は心の中にあるのかもしれない。

だれかの

そして

自分の

「すぎだよ」

髪をかすかに揺らほどの囁き

ちいさい、だけどピンと張った弦の音色のように透き通った響きは、
ぼくの心もほんの少しふるわした。

今までのがむしゃらな悠希の思いよりも

「ぼくは……悠希が想ってくれるほど、想うことできるかわからな
い」

「そんなのかまわない。望が望であれば」

ぼくはぼくと胸をはって言える日がぼくにもやってくるのだろうか。
か。

25・望 5 〱葬儀（後書き）

残すところエビログのみになりました。
あとしばらくお付き合いをお願いします。

26・エピソード

あの日以来、悠希に逢うことはなかった。
お見舞いは、彼女が拒んだからだ。

『映画のことなだけどさ、好きな人がいたらやっぱり死にたくな
いって思うよね。二人とも生きられる方法を考える。だから俺、絶
対に病気に負けない。でも、望に逢っていたらそれだけでいいって
思っちゃうから、治るまでお預け』

別れ際のふざけたような言い方とは裏腹に、それは悠希の本心だと
わかったから。

彼女の意味に副おうと思った。

そうじゃない。

なにより、ぼくが彼女に逢いに行ったら、昔のように突然彼女が消
えてしまうのではないかって、そんな不安を感じていたからだ。
だから逢いにいけなかった。

あの日以来の生活は、まるで悠希に再会する前に戻ったようだった。

真理先輩しんりもなにもいってこないし、ぼくからも聞かない。
それは悠希が生きている証拠だっと思うから。

高2になった始業式の帰り道、いつもの公園を歩いていた。
満開の桜の下を入学式に向かう新入生や母親たちとすれ違う。

桜のトンネルの向こうは真っ白に輝いていた。
まるで新入生達の希望が光っているように。

希望か

『悠希の希は望^{のぞむ}と出会って希望になるんだ』
そんなキザな台詞を小さいころから悠希は恥ずかしげもなくいつてた。

桜吹雪の向こうに、また人の形が現れた。

光の中から生まれ出たように。

目を細めてその姿を仰いだ。

同じ高校の制服を着た少女が駆け寄って来る。

肩より少し長めのストレートヘア！。

「おひさしぶり」

ぼくは平静をよそおった。

「ちえっ、わかつちゃった？」

ちよっこつと頬を膨らませている。

どんな姿で彼女が現れようと、もう見間違えることはないと思う。

「元気になったんだ」

「うん」

彼女は大きく頷く。

「でも、これカツラ。まだ短いから」

照れくさそうに前髪を引っ張る。

「望の趣味にあわせました」

「ぼくの趣味？」

「そう」

「どうして？ ショートも好きだよ」

「えー、そうなの。望は絶対ロング派だと思ってたのに」

ぼくはかすかに微笑んだ。

「それも似合ってるよ」

「だろう、絶対いけてると思ったんだ。奮発したんだぜ」

悠希は首を振って髪を空中に泳がせた。

「その制服」

「一年の悠希です。先輩、よろしくね。うふっ」

スカートの左右を軽くつまんで小首をかしげ、右足を後ろに引いて軽くポーズを取る。

「俺にまかせとけ。悪い虫は追っ払ってやるぞ」

俺の後ろからうわずった声がする。

「真理^{しんり}！」

悠希がうれしそうに声をあげる。

「さっそく、こいつを追っ払ってやろうか？」

「望はいいんだ、ぼくの大切な人だから」

？

「た、た、た、大切な人！ お、俺は認めねえからな」

「うるせえな、真理はあっちいつてろよ。ぼくは望と話がしたいんだから」

？

「毎日見舞いに行ってた俺よりも、一度も来なかった薄情なこいつがいいのか？」

「あたりまえじゃん。好きな人には元気な姿しか見せたくないの、ぼくは」

？ ？ ？

「？ ぼ、ぼく？？」

「“わたし”だと、まだちょっと抵抗があつてさ。俺よりいいだろう、ちよつとは女の子らしくってさ」

「まあ……」

五十歩百歩というか、“ぼく”とか“俺”とかの問題よりも話し方が問題？

一年近く経ったぼくの身長は、彼女より少し高くなっていた。

そして、今彼女は自分のことをぼくといい、いつの日かわたしというようになるだろう。

たぶん…かな？

やがてぼくも俺に変わるときが来るかもしれない。

ぼたん雪のように降り注ぐ桜の花びらを身にまとった彼女を見つめていたぼくの心臓が、一瞬ドクンと大きく波打った。

26・エピソード（後書き）

今まで読み続けていただきましてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9519d/>

ぼくがぼくであるわけ

2010年10月10日12時36分発行